

春 煙 記

やつぱりあをくとしたあたらしい人々の若い詩歌がよい——てらくと目をあびて、樹がた
くさんあるところへでも行くと、又さう思ふ。

ややもすると昨日のやうに、今更のわかさでもあるまいとでもいふ風に、その風や春色のしみ
てゐる詩歌を軽蔑してゐたことがわかり、妙にはづかしくさへなつてしまふ。境涯に即して淡々
としたものもよいが、すねたり深刻すぎたり、或はすつかり生氣を失つてしまつたやうな佗佗寂
びの、世に馴れてしまつた詩歌はどうもよいとは感じられない。

花や樹や水を見ると、よりするどく、いつも新らしく、春がうるんで、何とも云へずあざやか
である。それを見ると西洋の味も東洋の傳統もなく又定形詩と自由詩のけじめもない。清火一點
李の花の白さ、うす紫ですらある水の風をかんじ、もつと、僕たちは若くあつてもよい、永久に
處女作をものしてゐるやうに、たえず氣分の清遠な感情に春のあるものを作品にしたいと思ふ。

もつともさういつたところで個性にも依る事であるから一般には云はれないが、どうも古くな
りやすい、水がない、風がない、匂ひがない。下手な寫實と心境に固つて、解放されたやうにい

つも自由に變化し、川のやうに流れる力がない。即ち一抹の春がない。この氣温と四季の變化に
處する感官のない人は氣の毒である。どうかしてこの日の色と風とを作品に失ひたくない。もし
て夢の中まであたらしくして、作品の構造をすら、より自然に摸したいと思ふ。どうも僕たちは
作品の若さを恐れてゐる。幼ないもの、新鮮なものに苛酷で、考へ込むだものや、道理のある、
より智慧と曲折のあるものへ陥りたがる。それは悪い癖である。

詩歌といふものは、より新らしくなくては價値がない。即ち自然のやうに尖銳的で、變化きは
まりなく、生々しくすらあつてよい、僕らはまだ春に煙る木々の穂先すら一枚の豆の葉すら捕へ
てはゐない。まして動物のゐる、昆虫と花のかくれてゐるこの展望の中にどんな奇怪な詩歌が存
してゐるかをさへ知らないのである。

桃がるい／＼と花をつけ、光線が夢以上の綾を織つてゐる木のあたり、風が耳を刺し、眼に青
みかしまるやうな處で、ふと僕らのしてゐる事を考へると、心が妙に堪へられなくなる。夜の詩
歌、思索の詩歌も悪いとは云はないが、しかしこのわか／＼しさ、青やかさ、そして鋭いそして
豊艶な、天然のおもしろさを、どんな幼い形式でもよいから、新らしく摸してみ、絶えず一片
の詩ですら處女作の氣で發表してゆきたいと思ふ。

遅櫻記

むかしから一口に花と稱すれば櫻であるが、櫻と謂へば遅櫻だ——と私は思ふ。櫻といふものは遅く發く種類ほど艶美で、亦古雅な、情趣纏綿たるものがある。

若い、ほの白い、彼岸櫻や染井吉野といふやうな種類の初花は、はあもう發いたかなあといふ感覺的な味だけのもので、その頃の、所謂春日熙とした大氣といひ、曉の、朝の、日の中の、夕暮の、影や匂ひがよいのだ。その中に楚々として、はんなりと發きかかり、散り易く、どこかほろりとした青春氣分があつて、敏感な日本人にびたつりとするらしい。恰度、若い娘たちを乙女とよんで稱へたり、その半開的な紅頬や、うぶな匂ひや生理感がよいといふやうに、人々は一重の初櫻を鑑賞するらしい。然し、まだ古詩の、女有り春を懷ふ——といふやうな重厚に抵らない。否むしろ、その微かな紅、はかない花瓣の色、觸れなば散らんといふやうな敏感なところがよいのであらう。そしてすぐ本來の無常觀と結びつけて、三日見ぬ間の櫻かな——とやるところに日本人の心意氣があるのかも知れないが、人間も不惑過ぎると、あんな白つばい埃つばい、巷

間の花見氣分の櫻は厭になる。それよりも深山の櫻だ。片田舎の遅咲きの櫻だ。

紅葉は深山から初まつて端山へくるが、櫻は端山の花から初まつて幽谷に抵ると謂ふ。その都市や近郊の櫻が散つてしまつて、葉がくれに八重櫻がぼつとりと色づく時分、巷の女たちなどがもう櫻といふ觀念を失つた頃、東北地方を旅したり、やや深い山間で見る遅櫻といふものが、何だかむかしからの本當の櫻の味ではないかと思ふ。何しろ國花だけあつて、私達の頭の中にある櫻といふイメージは無限にある。歴史的に、傳説的に、亦地理的に、櫻に關する定見や説明は多過ぎる。和歌や俳句を調べただけでもうんざりする。何しろ日本中が櫻だ。櫻の國である。その中から「自分の見た櫻」といふ觀念をはつきり列出して見るのは容易でない。何といつても櫻といふ花は、日本地理の背景なんだから、そしてむかしから悅樂的な幻想の實體なのだから……。

一名、夢見草といふ、亦、曙草、仇名草とも謂ふとなると、クラシクな連歌である。敷島の道である。そして更に清元、常磐津になつてしまふであらう。能因法師も花にはほろりとしたらうし、秀吉も醍醐で相應に氣分を出したらうし、熊野も泣きお夏も狂亂し、助六が頭痛を發し、芭蕉の眼には涙がたまつたらうし、大西郷は銅像になるまで花見をしてゐるのであるから、日本に於ける「櫻」の文學や繪畫を聚めたら制限がないであらう。まして日曜だ、ハイキングだとなつたら、櫻よりサンドウィッチだ。たまつたものではない。従つて、櫻見よなら、深山へござ

れ、である。或は島の櫻もよからう。荒磯のもよからう、陋巷のもよからう。只、櫻はあまり多すぎるので、その環境と、観る者の感情一つでよくも厭にもなるのである。

二

私は七月初めに、釧路の魔周湖から北見へ行く山間で、可憐ともいひたい千鳥櫻の發いてゐるのを見た。それはまるでむかしの氷室櫻とでもいひたい、うすら寒い、山の草のやうな、そしてはかない愛らしい風情をもつてゐた。それから仙臺近くの田舎で見た枝垂櫻の大樹、うす紅のやや濃い絲櫻といふものは幽艶ですらある。名所では吉野の雲井の櫻又は花の櫓と呼ばれるあたりから、山の背につらなる千本あたりの俯瞰。むかしの武州小金井の葉櫻、伊豆天城の北峯の山櫻、或は名もない田舎の遅櫻、もう夏だといふに、葉がぐれに發見する餘花、この餘花とよばれる頃のもの、何とも云ひ得ぬほど濃纖で重厚で、餘情あまりあるものである。

遅櫻の好きな私にとつては、櫻だけは東京以北がよい。中國、四國あたりの、山のものや八重はよいが、白つばい普通のものはいくはない。殊に九州はもうよくない。櫻も何十種とあるのであらうが、どうも中温帯のが適地であらうと思ふ。染井、吉野などを、例へば札幌やワシントンへ植ゑると、薔薇科だけあつて、どこか林檎や山梨に似てくるのではあるまいか、亦特殊な風情が

あるといつても、あの透明な柔かさとははしいやうな果敢ない味がなく、何となく酸味でもあるやうに、白く強くくつきりとしてしまふ。或は荒川の五色櫻か、淺黄櫻、鬱金櫻といふものも何だか異端的でよくない。湯ヶ島の落合にある鬱金櫻も、よく見ると外國の花萼を見るやうで、私には有難くない。それよりも田舎にちらばつてゐる胡粉にうす紅つけた奴の遠望がよい、花の雲とか、花の雪とか、或は花の浪、花の淵、花の瀧などといふ形容詞もまるつきり嘘ではない。俳句でいふ花の筏とか、花の鈴とか、花の簪とかいふ情景も悪くはない、祇園の櫻でも、嵯峨でも嵐山でも、あの人出がよくないだけで、花に罪はないのだ。櫻のあるところなら、山もよし、川もよし、渡舟もよし、お寺もよし、ホテルも何處もよい、よく風が荒れるのは困りものであるが、雨の降るのはよいものだ。雨の中の花には特異な感情がある。曉もよし、夜もよし、黄昏もよしである。

要は自然の環境にあつて、思ひきりのんびりと、古く、天然に育つた奴ほどよいといふことになる。山岬の杉や樺や雜木をぬきん出て、ほかりと白雲のやうに秀でてゐる山櫻は何といつてもこの季節の天位だ。山の梨もよし、朴の花もよし、青い粒々の花をこぼす楡櫻もよいが、淡紅で、清奇で、斧にも鉄にも觸れない高嶺の櫻は、なるべく保存して置きたいものだ。元來が折つたり伐つたりして來た櫻はおもしろくない。名人が活けておもしろくなく、鉢で育てても風情が

ない。これは不思議だ。従つて住宅の櫻、庭の櫻、堤の、廣場の、牧場のと、人工的に作つた櫻並木もあまりよいものではない。それは何となく安つばい、苛酷がある、無理がある——飛鳥山や上野の櫻を見ると、江戸時代の囚人を見らるやうに思へる。それよりも三里塚あたりの、のんびりと大きくなつて、牧草にほんのり影を置いてゐるものの方がよい。故に私はこの十年ばかり花見といふものをしたことがない。櫻の剪枝を買つたこともない。花を見ようと思へば、信州、福島、秋田の方へ、四月末から五月へかけて歩きにゆく。櫻の名所へゆく位ならまだ紙で作つた所作事の夜櫻でも眺めて、獨り微薰を發散させてゐる方がましである。

三

櫻は氣分だ。環境に於ける天然の花を、いかに感覺的に、亦哀情をすら含めて味ふかといふところにあるのだと思ふ。

特に西行櫻も、秋色櫻も、亦は左近の櫻とか、墨染の櫻とか、昭君櫻とかいつても初まらぬ。歴史は形骸のものである。傳説も糟糠である。しかも私達にとつて截り放つことの出来ない地上の花は櫻だ。これは私達中温帯の生物にとつて、その環境と空氣とが巧みに配置してくれたやうな花だ。その少年期から青春、やがて古風な辭世的な感情がやつてくるまで、私達を周期的

に取巻いて咲いてゐるところの、土の匂ひ、海の匂ひ、或は山の精とでも云ひたい花である。少しく誇張するなら、私達の民謡の花だ。子守唄から死の挽歌まで唄つてくれるところの花だ。従つて、あまり疑らずに、歪めずに、天然にして置いて、時に風懷を抒べ、時に涙し、時に飲んで酒杯を共にしたい花である。

春はもの思ふ。殊に櫻といふ奴は女子供にすら何となく哀情の感を起させるものである。花が發いた花が散つた、雨が降つた、風が吹いた——そして誰にも春は無情である。人戀し灯ともし頃をちる櫻で、人間もこの季節にはセンチになつてゐる。愛戀的になつてゐる。若い人々には歡びを、老いたるものには追憶を強ひる。先づ私達には追憶だ。雨が降る、旅にでる、孤獨だ、さういつた時に見る櫻は、方に適當の花である。

温泉宿で、山中の自動車で、湖畔で、漁村で、岬で、山頂で、片田舎で、名も忘れた驛で、見るとしてもなく櫻を見る、思ふとしてもなく春を思ふ。そして偲び、慕ひ、あこがれ、あきらめ、悲しみ、歌ひ、慰めるところのものは、「花の味」だ、「櫻」のもつ情趣である。朝露ながら、露のなかで、白齒のやうな籬の櫻を見る、或は寂とした山中で、森々として幽滅をつくしてゐる山櫻を見る。黄昏、見知らぬ丘で、町で、美しい花の香を感ずる。月の光りに花のうす紅むな粒々を見る。人を襲ふやうな八重櫻の匂ひ、その女のやうな惱ましい姿態、或はいつの間にか吹いてくる

花片、奈良の寺の、京洛の料亭の、古い徑の、思ひ出の町の、赤いはかない夜櫻——三日にして散るといふ運命的な、花といふ風と雨と空氣の肉片。亦、むかしの若い叔母の、従妹の、戀人の、妹の、半開な、紅色な、生々しい花の感觸、或は時代の、江戸の、廓の、野邊の、隣りの、年々歳々、いつも春がくると、人を回想の夢に導く櫻。

さういつた意味で、私は櫻といふと遅い、自然の、名もない、新らしくつて、淋しくつて、しかも凛々と發き、はら／＼と散り、いつかたつぷりと大氣を含んで、葉櫻になつてゆく——その季節の色線としての櫻を愛したい。歴史も不愉快だ、傳説もいらぬ。うぶで、潑刺として、しかも幽艶で、情的な、山の娘のやうな櫻ならうれしいと思ふ。

茅舎をつくる

もう不惑も過ぎて久しい故か、この頃はしきりに茅舎がほしい。しかも宇義通りの茅舎でよいのだ。茅屋といふと大きい氣がするし、草庵といふと坊主くさくていけないし、先づ百坪の荒蕪地に、二十坪ぐらゐの草葺きがつくりたい。孤屋一室、塵累を屏絶すといふ譯にもゆくまいが、安い平屋で、家族の者の部屋が一つ、臺所が一つ、少し離れて書齋であり寢室である自分の部屋が一つ、そこで靜かに寢そべつて、細帯一つで居られるやうな氣安さにつくりたい。室生の庭、萩原の書齋などを見ると、自分ももう何とかして茅舎に熱居する年齢になつたなあとと思ふ。

大きくいふともう旅にも飽きた。ネクタイにも帽子にも、流行唄にも狂言にも飽きた。もう少し金があつたら、放情自娛、晴耕雨讀でなく、晴釣雨眠といつた調子で、ふだん着をだらしなく着て、世説新語の中の人物のやうに、無頓着、無關心、へんてつもなく社會の外にふんぞりかへつて暮したくなつた。そしたらさぞよからう、極めて清雅に、修竹圍繞といふのでもなし石色緑潤などと贅澤は云はない。名圖とか巧庭などはいらぬ。貝殻のついた海苔朶を少し垣にして、あとは草蓬々でよろしい。どうせ私の好みからゆくと魚盤米黍の地であるから、大きい樹もいら

ない、竹林もいらぬ、安い蘆荻の地でよいのだ。安別荘の潮風にさらされたやうな、材木のシンが出たやうな手荒さでよい。それも極めて低くつくる。颯風がこわいから。そして竹檻葦籬、霞のすだれに、竹の屋根でよろしい、出来るなら蝸牛の殻が草の中でころがつてゐるやうなものでよいのだ。室内は一几一軸、野草でも古壺へ投げ入れて置いて、番茶にカキ餅、古帷子に煙草盆、あとは酒と手料理だ。コマ切れにバター、或は干物にチーズ火豚ぐらゐは買ふが、多くは片田舎のものでやつつける。朝は麥の茶漬、晝は小魚、夜は青胡瓜を嗜つて焼酎に堅豆でもよろしい。時に豆腐屋をよび、縮賣りも呼びこむが、出入の肴屋などは来てくれなくて恰度よい程度でやりたい。只この茅舎にも僕自身の好きなものだけがあればよいのだ。

夫れには好みがある。小門に合歡をなるべく水々しく、深々と植ゑる。夢のあるもの、忍冬花とか、長春、或はかつらの類、それからふじ豆、からす瓜、卯の花にへくそかつらさういふものをめちやくちやにからませて、圍むに矮垣を以てすといふ調子、凡て低く遠景と平均にぐらゐ、石や泉も欲しいが、先づ後のこと、只一本の芭蕉を植ゑ、あとは好きな草、草ふじ、防風、濱大根、葎で充分だ。雨によいやうに、風に心配のないやうに明暗のあまり變化のない、人の注意を惹かぬものにしたいのだ。然し自然の細流は是非とり入れたい。鮎たなごは春秋の友だ。天氣のよい時には青いきり／＼すのやうに、草の中で、田舎の兒に西遊記でも講じてやりたい。犬猫

は飼はない。蟹を飼ふ、金魚は不用、シヤポテンはならべる。蘭も少し。あとは枸杞の叢、迎春花、水草の類、一つ葉とか水玉草を水に泛べる。そして跣足である、水道がなければ井戸で行水だ。この行水には亦是非夕顔や絲瓜や蔓ものの草がほしい。初夏がもや／＼、冬が凄涼とまでゆかずとも十年、荒れにあらくれてくると、注文通りだ。潮風がくる、キスの風、ボラの日和、ハゼの天氣だ。そしてカイヅの月夜、マルタの暗、一竿擔いで、まづ四方一里は繩張りである。そして月に三篇ぐらゐ詩が書けたら文句はないのである。尤も、米鹽のためには東京へも出るが、早寝早起き、室に入るは清風、飲を照らすは明月とまでゆかずとも晝は蠅夜は螢。蚊帳の中から蘆の中の月が拜めれば充分獨り、蛙のやうに腸を洗つてどうやら歌ひ乍ら生きられさうだ。どう考へても落ちゆくところは夫れに盡きる。あのガタ／＼したヴィラ風もよくなし、まさか支那風にやると地震が危し、蒙古の包屋も不用心だし、といつて窩豪のやうに天然の勝地は得られないし、出来るなら一つ船室のやうなものだとか、電車のポギー式のやうなものも欲しいのだが、やつぱり飽きるだらうと思ふ。洋服もいいがやつぱり胸の自由な日本服だ。椅子よりも胡座だ。絨氈より疊だ。ソファより縁側だ。何しろいろ／＼な耳目の悪影響を洗ひ落したいのだ。とても瑞西へは行けない、西藏人になれない。紐育も巴里も他人様の夢だ。それなら氣輕に好きなもので、素面素手で、そこらにころがつてゐるもので易々と暮らしたい。スペイングラアだつてヴ

アレリーだつて、異人さんは異人さんだ。といつて一茶の、良寛のなんて、とても及ぶものではない。おれはおれだ、川崎の惣之助だ。單衣が破れてゐたつてよいではないか、銀座で蝶鮫の卵を捜したつて、キリアーヂを一生に一度買ったつて、倫敦製の燭臺を欲しがつたつて、結局はこの茅舎だ。とまあこのあきらめが基礎工事の第一條件である。それから國史もお究めなさい。新疆探險誌も、レドモア島誌もお調べなさい。堀口君にインカ帝國の古譚を訊いて、霞町の二三吉に「から傘」を習つて、ニウグランドでキャバレを観て、古本市を漁つて、西湖龍腸を啖べて、鱈の委酢でバイーやつて、月に十句發句を作つて、先づ健康を注意するぐらゐが關の山である。この頃はそのイヤミや半可通や野望などがよく解つて來た。解つてくれば稍殊勝と謂はざるを得ない。その自分といふ明治の遺體を處置するには、如上の茅舎が一つ必要だといふことになる。といつた意味で、この頃はどこにしようか、さてその順序はその金はと柄にもなく質實に考へるやうになつた。年齢はとりたくないものだと今更に惟ふ所以である。

月に就いて

歳時記に「初月夜」陰曆八月初の月をいふ——とあるが、十年來注意してゐるが見たことはい。初月夜門二三歩の美しき——そんな句を作つたこともあるが、これは想像だ。確かに一日の月は夕榮の雲の中にあるに違ひない。尤も十四五年も前に、晝、金星の見えたことがあつた。田舎の草山にでもころがつて、待つてゐたら、或は初月夜の纖細な月の絲が拜めるであらう。

荒波や二日の月を捲いて去る——と子規の句にある。歌謠類では、すぐ淡さ果敢なさを二日月と形容するが、事實は草の芽のやうに、夕榮の上に萌黄に出る。よく川釣りの歸りに看る。夏と冬に見る、春見たことはない。特に蒙古の洮南で、土牆の上に見た二日月は葱のやうに青かつた。上弦の美しさだ。

三日月といふと恐らく新月の代表だ。纖月、月の劍などと異名があるらしいが、千年も前の琉歌には、こがねの太刀に擬したのがあるし、もちろん、支那では峨眉として美人の形容である。

みかづき——發音もよし、歌や句には無數ある。中には細い月は皆な三日月にしてしまふ都會文學もあつて、宵にちらりと見たばかりで、すぐ小唄にもなる。全くあれはキンの櫛だ。弓だ。乙女に、青年に、小兒に、幻想の對照に好個のものである。然しよく凝視すると、黒い卵を抱いてゐる指輪の半片のやうで、ちよつと氣味がわるい。

四日、五日の月、われ／＼素人に直観で解るのは、先づ七日くらゐからであらう。それに舊曆でも注意してゐないと、月齡は現代にすぐピンと來ない。銀座などでは全く三角に見えるだらう。左手から出る月がどうかうのといふだけで、何となく古代アラビアめく。沙漠ではよからう、島ではよからう。竹の中や瀧や雪にもよからう。釣りにも明るくなくてよろしい。然し多くは雨か雪の中にあつて、老いたる百姓漁夫のやうな人物でなくては注意しない。古い巫女の呪文などがかかつてゐるやうで、私にはすぐ琉球の島が思ひ出される。

十日の月、夕月夜、宵月夜となると、何となく花やかでよい、夏の明るさ、秋の愉しさ冬の寒さが感じられる。二十代の頃、どこかの田舎で、セツぐらゐの女の子四五人と、夕月を見乍ら歩いたことがあつた。その故かいつも麥笛を思ひ出す、食事を思ひ出す、盆を思ひ出す、そしてい

つもどこかに淋しい花が咲いて、白い梨の花のやうにこぼれる感じがする。

十三夜、明治の味である。「たけくらべ」を思ひ出す。春は温泉のけむりを、花の露を、港の帆柱を、潮の巖を、草の野川を、そして町中のさびしい、然し安らかな明るさを感じる。後の月といふとさびしい。別れて年老いたる女を思ひ出すやうな句ひがする。そして色彩からいふと、清親の線だ。私はどういふものか、芭蕉の、市中はものの匂ひや夏の月とか、蝸壺の句は十三日あたりの月のやうな氣がする。そして私の旅情は、いつも琉球で尾類の蛇皮線を聞いて、泡盛をやつてゐるやうな微薰を感じてゐる。

十四日、十五夜、これは釣魚をやつて、潮の時間を氣にしてゐるから、毎月よく解る。若い時分は、春の月がよかつた、さびしい花の月夜がよかつた。田舎がよかつた。然しこの頃はどこにゐても同じだ。山でも湖でも川でも海でも、港でも沙漠でも、島でもビルでも、いつも毎月見てゐるので、むしろ雨夜の明るさの方が思慮ぶかくてよい。

一ト頃私は、古今東西の、月の繪と月の文學を編輯して見ようと意企したことがあつた。句でも二三百作つたことがあるし詩でもやつて見た。更に一ト頃神經質の文學、黄昏の文學が流行した頃に、彼は神經に月光をもつてゐる——といふ言葉が流行つた。月に對する空想や想像は無限

だ。私も好きだつた。然し寫眞で見る菊石の月球はよろしくない、センチな、妙に貴族的な、虚弱な味もよろしくない。私は若々しい、涼しい、豊かな、キン色の月が好きだ。凄凉のところへ月を出されると、かへつて凄くなくなる。ポーなどのものには、あまり月が出て来ない。支那の怪異小説でも、月が出ると、どうも明るくつて仙境めいて、肉迫する凄氣の美がない。下手が畫く月の繪ほどつまらないものはない。凡人に月は只鏡だ。光の輪だ。

樗牛の「月夜の美感」といふ文章はもう忘れたが、この頃の文には、あまり月が優遇されてゐない。昔は「いつも月夜の米のめし」といつて、暗い地上にゐる百姓などは月を讚美した。その民謡は澤山ある。支那でも詩人達は月を禮讚した。その雄なるものに李白などがあるが、月を盃にしたり酒樽にしたり、かなり奔放なことをやつてゐる。西洋のダイヤナなどは少し色づばい。西洋では月は若さだ、然し東洋では幼氣と老年の心境だ。どつちがよいといふことも出来ないが、月を丁寧に扱つて、いつも生活と親しくしてゐる俳句などが、その雄なるものであらう。

月が宮殿だつたり、船だつたり、月の中に兎や鼠や蟾がゐたり、神がゐたり、美人が眠つてゐたりしたのは昔のことだ。探險隊は月世界へはまだ行けない。悪い科學の夢想だけだ。従つて月のよいのは地上だけのことだ。場所と境涯によつて面白いのだ。旅で、家で、戀人と小兒と花

と、酒と、音樂と、繪畫と、文學と、その中に才媛もゐるし、風來坊もゐるし、妓がゐるし、乞食がゐるし、毒婦もゐるしで愉快なのだ。

幼時には月がふしぎであつた。おもしろかつた。月と歩いたり、ふざけられる氣がした少年の時には凄かつた。ヘンだと思つた。大人ぶつて見たかつた。青春の頃にはさびしつた。泣けた。歌へた。月そのものよりも此方の感情で、どうともなつたのだ。

アルプスの上で、或は太平洋で、或は警察の窓で、吉原の空で何となくロマンチックな月を見た。

然し三十以上になつてくると、只、感覺上でよかつた。感興そのものと月が一つになると、その寂寥がよかつた。色もよかつた。冷たい女王のやうな、燃えつくした青春の名残りのやうな、どこか病める味もわるくなつた。それが四十を越すと月の奥の奥が見えるやうな氣がする。寂寥にも馴れ、悲しみにも馴れ、貧しさをも經てくると只その無心な、無垢な、つめたい自然の底が、死の一步前のやうによく解る。そして只、暗よりも月はよいものだと思ふだけで、降つても曇つてもおもしろいと思ふやうになつた。

月は東洋のものだ——どうもわれ／＼の祖先の文學は、太陽よりも月の陰影がより含まれて、諸行無常になり易いやうだ。夕月よりも後朝の朝月夜、そして押し照る天の月より芒の陰の雨の月の匂ひだ。雨月物語の味だといふやうな感じがする。

いくら華やかな月でも、時間の流れと、自然のめぐりまはりに乗つてゐるから、私達の地上の場所次第で、どうしても悲哀に傾き、ものの哀れになり、風流の本尊になつてくる。従つて月には添物だ。月光は描けないから月の添物を描いて、月光を表象するところに東洋の味が出てくる。西洋人は月の輪廓を見る。東洋人は月光を見る、四望皓然として、陰陽の古城の中にある。そこで蟲一疋、草の一片がおもしろくなつてくるのだ。この頃の文學は月を虐待する。主智派に月はいらない、プロ派にもいらない。人生に眞剣なる士は月を必要としない。して見ると、月なぞを騒ぐのは遊蕩文學か、猥亵趣味か、と來てはもう問題でない、問題にするにはあまり古い、そしてあまりにも淡く大きくふかしぎな別の世界の形象だ。私達の静かな天の戀人だ。その故か私はいつか暇な時に、ギリシヤの、支那の、西藏の、アラビヤの、アルゼンチンの、歴史の、文學の、風俗の、俚諺の、遊戯の、あらゆる月の形象を聚めて見たいと思ふ。

眞晝に月を想像することは、われ／＼ファンタジストの運命のやうでもある。太陽をあびてゐると、この世の賑やかさが反つてさびしくなるが、月の光りをあびてゐると、この世の寂びしさ

が反對に賑かに見える。未來のたくさんある人は太陽の前で唄ふがよろしい。われ／＼の年になるともう月の前でも思ふことが多くなつて困る。月を前にしてゐると、もうこの世の中の希望もないが、さりとてこの世の中の寂びしさも棄てたものではないと思ふやうになる。このさびしいまぼろしのためにも月はよいものである。

自 轉 車

今の世界ではもう古いもの一つになつてしまつたが、あの自轉車といふものがはじめてこの世に發明され製作された時に、十九世紀の若者や娘たちはどんなに喜んだであらう。彼等は靴に羽が生へて地球を一呎高く翔走する快樂を味ふことが出来たから、のろい地球の自轉からもう一歩出るつもりで、さかんにペダルを踏み、いつも見馴れてゐる街角や農園などをぐる／＼と乗り廻して、出来ることなら地球を一周廻りして見たいといふ夢を見た。そしてくる／＼と動いて走り廻るあたらしい風景の中で、若々しい春風のやうに呼吸をはづませた。

今まで乗物や馬車の上から、揺られながら他動的に走つてゐたものが、こんどは、アクチーブにすい／＼と走るのであるから、この感覺は車に羽がついたやうであつた。ギリシャ神話のマッキュリーの話は嘘でなくなつた。それに今日よりもつと野暮つたくはあつたが、然し二輪馬車よりもつと華車であつた。大きい一輪に小さい一輪をつけたり、木リムから鐵になるまではかなりの時間があつたが、既に氣の早いアメリカの若者などは、これに乗つて世界一周に出發した。サーカスでは、友達同志五人も乗れる長いものを製して實演して見せたり、一輪車で曲乗り

を見せたりしはじめた。各國で盛んに競技會をひらくことになり、日本でも僕等の少年時代にはもう既にこの潮流がやつて来て、各地にあこがれの選手がとび出したりした。

毛唐がさかんに長い脛のよさを示して、高いハンドルの上にそりかへりながら、ヨコハマ・神戸の公園などを乗り廻した。人力車の本家である日本も負けずになつて木リムの大輪をつくつたり、舶來に負けないものを作らうとしたが、やつぱり向ふのものでなくては眞に輕快なやつはなかつた。僕等も中學で優等になるよりも、あの自轉車を一臺買つて貰つて、日本中ぐる／＼とやつてとびあるきたくなつた。そしてやつとせびつてピアス印のレース用のものを一臺手に入れた時は、テキサスあたりの田舎青年のやうに喜んだ。銀のメッキの車體で、片手で樂に持ちあがる程度のもの、ギヤの二十七吋といふ大形をつけ、むろんハンドルとサドル以外の附屬品などはつかなかつた。そして靴もタイツもジャケツトも競争用のものを買つた。そして丸の内から上野或は京濱間をこれ見よがしに乗り廻し、競技會があるたびに不忍池畔や日比谷公園へ出かけて行つたものであつた。然し何としても日本人である僕等の矮小さがおもしろくなかつた。板につかない猿のもの眞似のやうで悲しかつた。この意識がなくなるまでにはかなり時間があつたと見えて、何とない後ろめたさの感覺が氣にならなくなつた時分には、既に日本も進んで國産品をつくるやうになつて來た。

小學校でも野球をやるやうになつた。官員さんなるものの變化した月給取りが、ローン・テニスをはじめた。曲馬團がオート・バイを運んで来た。バッテリー・フレールがオートモビルの競走のもの凄さを紹介しはじめた。新馬鹿大將が自動車でやつて来た。スミスが曲藝飛行をやるやうになつて、とうとうスポーツ器具たる自轉車が小僧さんの實用品になつてしまつた。そのあたりから僕等もばつたり乗らなくなつてしまつたが、然し用もないのに必ず一臺持つてゐたところなぞを見ると、僕等の十九世紀の夢がいかに自轉車によつて一つのエキゾチスムに培はれてゐたかがわかるのである。もちろん當時はコンクリートの填装された道路はなかつたから、敷石の上はバリ／＼とやる、田舎の凹凸面をボン／＼と走る、電柱にぶつつかるし子供もはねとばす。殊に田舎の路はまだ徳川期のうすあかりであつたから、古風なランプをつけたり提灯を腰にぶら下げ、さかんにベルを鳴らしはい／＼と嘯鳴つたものであつた。ふらり／＼と出てくるは自轉車乗りのピエロである。荷物などはどうしてい乗せられるものではない。自轉車とは一つのスポーツ機械であつた。

僕等はハマの公園で初めて乗り習つた。そして交互にやるペダルの踏みかたによつてさながら自分が飛ぶやうに思へるあの感覺を愛した。並木がつい／＼ととんでゆく、通行人がポストのやうにあとになる。風が匂ふ、空が生々しく青い、海が見えはじめる、くるりと廻ると別な横丁に

出る。橋の上を風のやうにとんでゆく、なんとかういふ味を知ることがは文明の恵みであらうと天に感謝した。そして箱根へ行つた。日向和田へ行つた。大宮へ、房州へ、一二泊でとんで行つた。日英同盟の祝賀會があつた時などは、チャブ屋のムスメ達がお振袖で公園をのり廻し、女の毛唐がよく人力車をぬくので、俵夫が怒つて馳けるが追つかない。自轉車同志が衝突すると、彼等は「萬歳」を唱へ復讐するといふやうな街頭風景が現出した。然し何としても日本の道路は悪かつた。海岸へ行くと砂へタイヤがめりこみ、山へ行くと石でパンクし、町では泥濘でハネをあげながら走る。そこで僕等もよく川へとび込んだり畑へころがつたり、お婆アさんを轢いてあやまつたりした。そしてよい路へ出ると田舎娘の花簪をたわむれにちよいとさらつてゆくなぞを得意としたもので、山手の黒紋付に袴の書生なぞの間へわりこんで、どんとつきあたつて逃げる。知つてゐる町娘などに逢ふと、ボンと後ろからとび下りて、片手で車體をにうと差上げて見せたものであつた。

東京はまだ人力車と馬車の世界であつたから、品川から上野まで約一時間でとぶといふことはスピードであつた。牛屋の女中さんなどがファンで、競走には應援にやつて来た。やがて醫師が乗り初め、教員達も乗りはじめた。そして皆得意であつた。僕は用もないのに日比谷公園を十周して見たり、必ず丸の内へ行くことにして、お濠へも二度とびこんだ。あれから二十年、この頃

でも釣りに行く度びに時々乗るが、萩原朔太郎君が初めて東京生活する時に、この自転車を持つて来たのを見た時には友ある哉と思つたことがある。同君も僕に負けないくらゐの自転車ファンであつたらしい、その他には全く自転車で乗る友を今僕は知らない。

そんな譯で今でも僕は自転車を愛する。あの乗心地と感覚を愛する。古いキネマで自転車が出てくるとうれしくなる。出来るなら自動車などに脅かされずに、平坦なアメリカ大陸などをくろくやつて見たくて仕様がな。煙草を吹かしながら、地平線を追ひながら、ぐるりに春風を截つてのんきに女の子たちと遠乗りがして見たい。むろん今の都會ではそんな古風な男もあるまいが、何としても自転車といふものは愛らしいものだ。僕等の少年期のものであり文明が文化に代る一個のチェーンを象徴するスポーツ機具である。

私の旅行法

むかしの旅は、主として距離と旅愁の問題であつたが、今日では、旅行とは單に時間と經濟の範圍に於ける、遊離的快樂の一項にすぎなくなつた。

むかしは奈良や京都へ行くにしても、自家から何百里來たとか、或は舊都に在つて家郷を思ふ、といふところに、旅行の妙諦があるやうに思つたのであるが、今日では奈良や京都は十時間の汽車の行程であり、往復二十圓内外の遊覽費の問題で、只どの位ゐの遊離的或は疾走的快樂を得らるるか商量に過ぎなくなつた。

距離は時間によつて計算され、旅愁は經濟如何によつて、その多少を商量されるやうになつた。更に交通網はスピードを加へた。今日東京と上海とは、すぐ連絡時間によつて計量され、世界一周の連絡もツーリスト・ビュロウによつて定價と等級とを區別されるやうになつた。そして「世界旅行案内書」と各國の新聞雑誌の普及によつて、人類の頭には倫敦と濠洲とはさほど遠いものでなく、又東京とアルゼンチンとは、只時間表によつて地球の緯度を跨ぐ問題でしかなくな

つた。

殊に僕等の周囲の人にしても、北海道人と臺灣人とが隣りあひ、又その人々は東京を中心として、絶えずその郷里と往復し、商用し交易してゐるから、昔のやうな純粹の旅人といふものは、絶對といつていいほど、その姿を消してしまつた。小學校の修學旅行でさへ、昔の水盃で出かけた程度の距離を、二日か三日で旅行して歸る。更に各地へ赴任する官吏や教員は、或は夏期の學校の旅行班は、日本の近海は勿論、中央山脈を隈なく踏破して、各自のコースを自由に地上に印せしめるやうになつた。

さう考へると、旅行とは、只遊離的快樂といふ一點にある。しかもそれが必ず何らかの附帶用件を持つから商用であり調査であるところの事情をふくむ。であるから、單に純粹な旅行をしようとするには、勢ひ各自が各自の型態をつくつて出發せねばならなくなる。地質學者は地質學者らしく、商人は商人らしく、音樂家は音樂家らしい、獨自なコースと型をもつて行くやうになる。そして時間と經濟と、夫れ相應の健康とを用意して、走り食ひ、眠り、見聞し、各自に共通な遊離的快樂の一點に遊ぶのである。

故にこれから旅行しようとするには、その離分度といふものと、時間と經濟、生理と要求とをよく調査して、あらかじめ豫定を作つて出發せねばならない。それ以上不慮の災難も減じた代り

に、又不意の出來事と、旅の興味といふものが大體限定されてゐるから、巧妙に旅行することは出來てもふしぎに旅行し行脚するなんて事は、先づ出來なくなり、冒險や獵奇的な葛藤もなくなる傾向になつてしまつた。旅行の唯物化！機械化、近代人はそこに新しい興味を置かなければならない。

二

従つて、名所舊蹟なんといふものが、近代人の視野には、至つてつまらないものになつた。日本三景といつても、死んだ寫眞と同じことだ。地理に關する近代人の審美眼は變化した。あの松島の箱庭のやうな脆さは美でない。天の橋立や宮島も靜的すぎる。今日ではもつと怒濤が欲しい、噴煙が見たい、懸瀑が眺めたい。更に大高原、火山脈、黒潮流域、珍奇な建物、怪異な風俗が見たい——さういふ氣分が昂まつて來てゐるから、小學生ですら奈良の大佛に驚かないし、まして死物同然な舊蹟や遺物なんといふものは、血天井や自然石のやうにつまらないものとなつて來た。

では君は、どんな氣持で旅行し、何を見てくるかと聞かれたなら、僕は即座に答へる。即ち僕は一種の遊離的快樂に始終するために旅行し、自分の見たいものを發見するために見てあるくと

——つまり時間と金のやりくりがつくと、よく健康を計つて、地圖にコンパスをあて、哩數と賃金表とを概算し、その範圍の中で、出来るだけ強固に、自分を振舞はんたみに出發する。途中、古い西行や芭蕉の風流心を偲ぶもよし、又冒險をしたり遊蕩するのもよいが、只出来るだけ「未知」なるものに就いての勉強をしたい——その一念だ。つまり日常事件から離れる。遠離の情をもつて、事物に新しい眼をそそぐ。人間一旦家郷を離れると、彼我新たになる。二重の觀照が出来る。僕は僕の尖端を行く、ぐるりを風にあてる。速力をもつて未知の郷土を飛翔してゆく、地理的變化、氣溫の差、風俗言語の相逢、境涯の變轉、それら一切が犇々と相剋し、反撥し、新しい位置を推し進める。この生活的追迫力の面白さ、楽しい感官の羽ばたき、意外な辛苦の味、時間と場所とが縦横に一致し、魔法のやうに飛んでくる食卓、雲の中に隠されてゐるホテルが、一朝にして現前し、豫知しない場所が不可測の時間の隅に展開される。

この探險的要求が、實際に巧妙なヒルムを重ね、旅行者は印刷された歴史や地理を、眼前の動植物や風光をもつて翻譯する。百年を一瞬に見る。そしてこの地表が持つてゐるところの、神秘、鬼氣を、身をもつて引攪む。この生々しい實在感、藝術に見られぬところの原動力である。それが爲めに谿谷が生きる、原野が起き上る、雲表が潑刺とする、黒潮が渦を巻いて、萬物がそれ独自の色彩と聲をもつて自分に呼びかける。僕はそれを僕自身の型態によつて、讀み且つ

感じ、生かせばよいのだ。

三

理窟はやめて、實際に就かう。

只、一つこの遊離的速力のある移動法は、その人相應の振幅を豫定することが必要である。赤んぼに世界一周さしてもつまらない。商人に高山縦走をやらしてもつまらない。世界とは單に一枚の着色ヒルムに過ぎぬ。従つてその人の性質、趣味、傾向の如何によつて高山植物も、海鳥も、山容も海灣も、その眞の姿を隆起せしめない。殊に旅中にあつては誰しもが納的存在にすぎぬから、あまりの廣襲、あまりの距離、あまりの變化は、その人の心の鏡に消化しきれない。それが爲めに沙漠の旅、海の旅、山岳の旅には、それ相應の準備のある人でないと適さないといふことが出来る。

殊に僕等にとつて、小野小町、義経、芭蕉、空海、役の行者、何々大師、西行その他知名の歌人紀行家の行跡はつまらない。まるで生活も審美眼も、事情も違つてゐる今日、それを偲ぶはよいとしても、チットモ感心出来ない。それに土地の怪談奇話は、圖書館で調べた方がよいし、方言に就いては、常に源平時代や、支那アイヌ馬來語の用意も必要だし、民謡を聞いても、その分

布と時代とを究めると、案外に名民謡に獨創なく、全國的に分布した一破片の變化を聞くにすぎない。名所案内も眞つ平だ。歴史傳説も誤傳や附會が多い。寺社の寶物もさうだし、公園などはどこへ行つても、大略同じやうだ（但し例外として、兼六公園、後樂園、栗林公園はある）だが僕は、名木とか、名妓とかは見たい、その代り奇岩奇窟といふ奴は嫌ひだ。寢醒の床も大歩危小歩危も厭だし、過日は耶馬溪も失敬して、只阿蘇の噴煙と山容の廣嶽からくる偉觀を望んで來た。

表にすると、自然七分、人間三、研究八、批判二——といふところだ。發見第一、實證二、自然科學を一位に、民俗學を二に、文學意識を三に、個人的欲望を四にして歩く。そして旅中の夢を信じない、只よき眠りを愛す。出来るだけ日本は船に乗つて、海から日本を見物する。水泳は一哩、歩行は一日六里、酒量は二合、旅費は保健上のメートルで計る。島では緯度、星座、季節、方位を注意し、停車場では時間と發着表と方言を聞き、海岸ではその一哩奥の地を見る。海岸は世界同一だ。殊に驛の建物もさうだし、近頃の地方都市の街區は、まるで東京の模倣で少しも興味がない。至るところ電車、自動車、汽船だ。特に飛行機もエヤー・ポケットに酔ふし、その日の氣流によつて出發しない時があるので、鳥瞰圖的な旅行は、もう五六年待たねばならぬ。そして女の人に方角を尋ねるものでなし、文學青年にその土地の事を訊くものでなく、新陳

代謝は八時間目あたりを適度とし、悪寒を怖れてあるけば、案外自由に健康と經濟とを一致させ、自分らしい面白い旅行が出来るものだ。

四

そんな氣分で、僕は臺灣から滿洲、北海道まで歩き廻つたが、次が飲食物だ。これが亦その旅程の三分の一を占め、その旅行をよいものにも悪いものにもする。

例へばこれから東京以北は、いづくの汽車辨も鮭鱈だ。西南は鯖と白味の魚だ。勿論近頃は五錢の値下げだけあつて、うまいとされてゐる静岡や名古屋もあまりうまうまはない。山葵漬、千枚漬、その他の名物饅頭によいものはなく、磯部せんべいとか、山北の鮎ザしだつて、各驛のアイスクリームと大差はない。そこで人は氣分を變へる爲めに食堂車へでも行くが、定食も先づ三流、あとの一品料理だつて、フライにカツにコールビーフ、それに、いづくも同じカレーライスだ。匂ひのある珈琲はなく、美味な果物は絶対にない。その點がややまじだと思ふのは汽船であるが、臺灣、沖繩、八丈通ひ、青森の連絡船その他の近海船は至つてまづい。只神戸門司横濱間で、外人が多い場合に、一等船客としては相當の料理を食はせるが、これは原料をアメリカで仕入れるからだ。全くやや匂ひのよい果物やよい野菜が食べられるのは、これらの外國行の汽船を

措いて他にはない。瀬戸内海や九州近海の船では、只量だけを目安に置いてその質は全くお話しにならない。特急「燕」「富士」の料理も、先づ三流以上のものでない。従つて心ある者は、京都の日本料理とか、大阪の小鉢物とか、東京の Grill で腹を満して、列車では持参のメニエのチョコレートか、果物の罐詰でも頬張つてゐた方が安全である。その點で日本は、より公衆的なものほどまづいものを食はせる國だ。

そこで旅行中の味覺の論理に移るが、僕はその點でも原料尊重論者だ。いくら「特急」の窓から、富士を見乍ら、或は蒲郡や琵琶湖畔を疾走中だつて、まづいものはまづい。今日東京でもう英佛料理、支那、印度、シヤム、回教、コレア、ヤンキーのメキシコ料理だつて、自由に食べられる。冬に西瓜を夏に凍魚を、生薑や實芭蕉、葡萄などはいつでも食べられる。その點で現代人には三種の食黨がある。一は何でもござれで食べるプロレタリア、二がイカモノや悪食に舌鼓をうつ舊時代の浪漫派、三が生新に原生動物的に攝食してゐる文化の尖端人、つまり尖端人は廣く尠なく食ふ、主として季節的に、地理的に、その主産物を生新に豐熱的に食ふ。特に外國物を強ひて罐詰で食はなくとも、鮎の地では鮎を、小島の地では小島を、その他鹽物にしても、蔬菜、野草、貝類にしても、新らしく多く、尠なく、齒に美しく、胃に軽く、頭に強く、選んで食ふところに妙味がある。味覺の眞諦は料理よりもその原生動物的な質にある——とい事を忘れて

はならぬ。

五

それには、新らしい料理よりも、新らしい舌が必要だ。

各地の古い傳統ある料理を食つて行くには特によい舌が必要だ。今日の料理は型だけは支那とか佛蘭西とか、日本とか云つても、質に於てはもう同じだと云つてもよい。金澤名物のジブ料理、廣島の牡蠣料理、長崎のシッポク料理、その他京都の芋ぼう、大阪の小鉢海魚のすき焼、東京の牛鍋にしたつて、純粹の精進料理でない限り、何らかの交ぜものなしには食べられない。由來東京以北は鹽辛く大阪以西は甘たらしく、先づ中京の名古屋あたりが燒物にしても、煮り物にしても美味であるが、僕等は只その味覺の交響樂に興味を持つだけで、只これは黄蘗の純粹料理だとか、京都系の庖丁の味だとか、江戸前の水切れだとか、只名目によつて賞美することをもつて誇りたくない。只質がよければよい、牡蠣にしても、赤貝にしても、鱈にしても、牛肉にしても、その原生動物的に見て、生新で豐醇ならばよい。酒もさうだ。白飯もさうだ。旅行中の艶笑的なものにしたつて、原質的に純粹であることを喜ぶ。ところが東京の女が多く地方種であるやうに、藝娼妓には純粹にその土地の者は尠く、料理も又同じで、洋食類は東京と大阪を措いて本

質的のものではなく、各地方都市では、わづかにその傳統による原産的のものを食ふより外にはな
5。

故に、旅行して、美味なものを得ようとするには、日本ではかなりの發見欲が必要だ。その人の嗜好によつて、舌によつて、自分に適したものを發見し撰擇することだ。その點が亦風景と同じである。僕は僕の望む風景を發見し、その颯爽たる大氣を愛す。名所などに碌な所はない。それよりも砂丘なり草原なり、新しい見だともない切斷面がいかに多いか、今日の列車の窓は、同じ土地を縦横に切斷して見せてくれたり、又自動車は雲や水の運行と共に、速力をもつて新風色を拓いて見せてくれる。その名狀し難い新切斷面は昔の人の想像し得ないふしぎな美だ。そこで明星を見る、風速を読む、黎明や黄昏を送迎するといったところに、新しい味があるのだ。

今日、珍らしいものと云へば、アフリカやバミール高原や南太平洋洲を旅行するより外にはない。然し見やうによつては、門司の埠頭にだつて、東京驛の埃の中にだつて世界の新しい美はあふれてゐるのだ。新日本の國民的景觀の中に、全ヨーロッパや南阿の風色が紛れてゐるのだ。そんな意味から、僕は今日の旅行とは、その遊離的、快樂の一面に於て心理的に、自然科学的に、種々なる切斷面の美を發見するといふところに昔と違つた意義があると思ふ。そして時間的

に地理的に速力をもつて、新日本國民としての旅行圏が開かれてくるところに、主眼點を置き、東京驛から東西南北、八方にその旅行慾を満足さして行けるところに今日の文化の恩恵を認めたいと思ふ。

詩を書かうとしてうまくリズムに乗りそこねたり、いやに字句が氣になつたりすると、どうも日本語といふやつが妙にむづかしいと思ふやうになる。あまり類語が多くつて、亂調子で、多元的で、尖つたり平べつたかつたり、固く圓く、ボキリとしたり、ギギとしたり、繼ぎ目が氣になつたり、ザラ／＼したり、始末におへないもののやうに感じられてくる。そんな時に詩的感興はもうとび去つて、へんに拘泥した心持ばかり残ると、人の詩でも自分の詩でも妙にいやになつてしまふものである。さういふ時につく／＼思ふことは、平常詩は言葉の靈であるの、精神の何であるのといつてゐる時と反比例して、全くつぎはぎの、間に合はせの、少しも本然のものに觸れてゐないペン先の遊戯のやうな氣がしてくる。

勿論精魂がはいつてゐない時は死物同然であるが、精魂を入れやうにも言葉が邪魔したり、動詞自身動きがとれなかつたり、聯も律も内容と一致しなかつたりするのは、あながち感興が來ないばかりでなく、實は日本語そのものと眞に融合してゐないが爲めでもある。そこで創作心理を

一步客観してみると、僕等は何の事となしに平然と使驅してゐる言葉そのものに、實は甚だしく冷淡で無關心ですらあることが解る。その點が市井の兒女よりも本家の詩人の癖に言葉に疎く、不自由を感じてゐるといふ羽目に陥つて、全く日本の詩人でゐて日本語を失つてゐるといふ状態にまでなるのである。上乘の作をしてゐる時は精神がどんな字句をもビクッと感受するからよいが、その呼吸がはいらないとなるといかな大詩人も無機鈍感で、出來の悪い作ばかりしてゐなければならぬ事になる。そこで人はどしてゐるかと思つて、人の作をとつて見ると人もかなり日本語そのものに疎く、大きくは時代そのものが既によい言葉を失つてゐるのではないかと思ふやうになる。

この言葉といふものとその人との關係をよく見ると、いろ／＼の状態と場合とがその人の要素をなしてゐることが解る。概して僕等は、否時代そのものがすでに混成語を使つてゐる故か、眞の日本語に疎くざごちなく、古典そのものより進化はしてゐるが善くは進化してゐない事がわかる。そこで又注意すると、甲の詩人は少しも言葉に注意しないで、無頓着に云ひたい事を有り合せの言葉で表現してゐるし、乙は平明で人の眼にたたぬやうにいぶしたり艶を消したりしてゐる

し、丙は又誇張したり昂ぶつたり、丁は好きな用語を用意し、奇語、怪語を成し、古典に入つたり、或は外來語と假名を交へたりして、いろ／＼の意味でその感情を有機化しようと努めてゐることが解る。

然し奇妙なことには、その悉くが完全な日本語でないとも云へるし、又日本語を現代化してしまつて、これ以上のことは出来ないと言つてゐるやうにも見ちる。それは全く文法と語源とに疎い現代教育や環境の弊であつて、人はその読み物の撰擇と書く物の傾向で、全く外國に類のないくらゐまち／＼である。第一にその名詞の漢字を忘れてしまつたり、あて字を書いたり、あまり言葉が多すぎて、言葉ばかり習つてゐたら、一生かかつて卒業されさうもないのは日本語だからである。そこで漢字制限やローマ字論者が出てくるのであるが、流石は詩人のうちで一人もそれに賛成してゐる人はない。といふのは、この複雑、この多數の文字の世界で育つたので、その様式の魔力から離れようとはしないからだ。その點で日本くらゐ面白い有難い言葉の國はない。萬葉にある言靈能佐吉播布國である。

三

さて言靈、その言靈である。ここで僕はちと主張させて貰ふなら、詩人たるもの特に日本語で

詩を成すほどの人は、もう一遍精神的に小學生になつて、言葉を靈として學び又それを血とし肉として使驅するために、アイウエオを初めからやり直す必要があるといひたいのである。今迄持つてゐる片輪なものを見て打ち毀し、忘れてしまつて、自己の性格から骨髓から言葉といふものを建ててもらひたいのである。五十音の母音から考へ感じて、日本語の神祕を解き、強ひてはその魂魄を活用してもらひたいのである。

全く僕等はいつともなしに、合成語や混成語の中に育つて五里霧中であるのである。そして漢字はめんどろでややくしいし、ローマ字は少くも曲もなし、いろはでは古いし、アイウエオでは幼稚だしといつて、新聞の合成語や古典や俗言の間に合はせて、物を誌してゐるのである。そして萬葉語は死語として斥け、文語も不自由だし、口語なんて名をつけてその實漢音と吳音を誤り俗雅折衷で間に合はせてゐる。ところが本家の漢字國では南北で發音が變り、又日本讀みも違つてゐるのであるから漢字も無籍に等しくなり、ローマ字も無理に「ロ」とか「エ」とかをつくり、いやはや文典も字訓もあつたものではない。海外ではどんな古い言葉も三百年來だからよいが、日本語は千年來變らないので、今でも神代のままの言葉があり、それに漢字をあててゐるからさらに複雑をきはめてゐる。たとへばといふ音は、葉、齒、端、羽、双であつて、神代の文字のない時代では發音でその具象する物の意味が通じたが、後に漢字をあてるやうになつては、字で

書かなければ解らなくなつたのださうである。元來五十音の神秘的合成は、到底ABCの類ではなく、口と舌で物の貌を象り、聲と精神で發想したものであるから、どんなことでもその音聲にのせると人に通じたものだ。それが今日では通じない。はといつても、齒であるか、葉であるか端であるか、更に複雑した動詞にあやつられるとなると、端し、橋、箸、などは習慣的なアクセントによらないと區別が出来にくい。では、はといふ音は何であるか。どういふ音、字をはなれて凡てを音にかへなければ日本語は解らない。音にかへすことこそ音韻の初めであり、言葉の眞の姿であるのだ。

四

それにはまづアイウエオだ。アイウエオを百遍口誦して、さてその音誦と字面との映像を見るがよい。堀秀成に云はせるとこの五音が五十音の母音である所以は、實に天地有情の初めから自然と言葉とが結びついて出来たので、その神變ふかしぎの綾に至つては驚嘆すべきものだといふのである。それには先づウの字だ。有とあててもよし宇でもよいが、ア行のウとワ行のウとは、嬰兒の生まれ聲と人の臨終の唸きとの違ひがあるといふ事から初まつて、ウは天地初發のさまを思ひ合し地球成始の狀と思ふべし、凡てはこの有から初まり、混沌の動き初める形で、開け初

め、觸れ出で、動き、伸びゆく、大なるものの音義であるとしてゐる。それには産る、動く、蠢く、唸くである。次がオだ。オは地母の成初めの狀に思ひ合すべしとあつて、わかれ下る象、ながく續く、すばまる、暗き、重き、或は起り出づる形であり、衰ふる、落る、溺る、臙、押す、多い、大い、である。アは天上の成初めだ。あらはれ、あひむかい、あざやかな、かろき、廣き怪しまるる象。上る。當つ、赤、朝、秋、明か、あでやかさである。それは阿をあて、又弘法があ。の字を略したのを橋守部もほめてゐる。あはあと口をあいて發音し全くあかるい、天の、雨の、暑い、赤い、あたらしい、あをい、あいらしい、すばらしい字だ。音もよい。イの音は地中の氣と萬物發生で、い、い、といふと勢ひがよい。のび、育て養ひ、すすみ、立昇り、力のある音だ。息だ。命だ。家だ。今だ。そして葦の形だ。エは地上が花咲き平らかになつた姿だ。繪、笑み、江などでうつくしい。この五つの母音がクヌツヌフムエルの父音と結婚して、三十六の子音を生む。即ちクとアでカだ、スとアでサであるといふのである。(エとキはウと同様もつと深甚だ)

五

なるほど、あは明るい、圓くて軽くつて、アポロ的である。そして暖かなものもあり感情の深

い和みをあらはしてゐる。ところがイはいで鋭い、細い突角があつて、敏で力があつて決定的だ。宇も勇ましいではないか。いつ、いつも、いかに——ちと攻撃の武器だ。ウウ、ちと臆腫である。紫である。陰影である。ウの字などは妖怪的ですらある。内である、牛である、鬱々である。浮くである。憂きである。そして呻く嘯く貌をした音聲である。すると又エは平らである。エエと承諾した貌である。悦にも入る、笑顔もする。日のあたる湖だ。平原の花だ。鳥もとび蟲もなき地は希望にみちてゐる。ところが又オは重い。長い、唄つても聲を長くすると必ずオーウーになる。聲母だ、聲音と精神とが接する動力だ。どうも悪い。ランボオの真似をするならアは赤、イは黄、ウは青、エは白、オは黒でローマ字國のやうに日本には鼻音がすくないし、ずつと完成され含蓄された音聲を尊ぶところがよい。鼻音の拗音のローマ字國などは、まだく新装の發聲機しか持つてゐない幼稚さである。

従つて外語には一音一字のものが無い。みな合成か混成か延言である。ところが日本語には木とか眼とか毛とか齒とか戸とか湯とか、單位のものは一音で名稱する。尤も眼をガンとかまなことか、毛をモウ、湯をトウと漢字をあててから合言をつくり、借言したり通言してしまつたので亂調子になつたが、古意を探ると二音のものはちやんと二つのものの寄りあひを形取つてゐるさうである。たとへば水と穀物で醸す酒は二音である。人もさうである。衣もさうである。特に前例

のはなどは、端や葉でもものの截ち切れた象であるし、しの字は嘴で、長い、下の、靜かな、音義があるので、端と嘴とかけてはしである。そこで漢字が一字で橋をあて、後にキャウなんと讀ませるから音韻が解らなくなつてしまつたらしい。漢字渡來後の日本語は、ここに初まつて音を字義に代へてしまつたのではなからうか。支那は字義、日本は音義だ。

六

蝸牛の觸角でそんな受賣りをやつてゐると牽強附會だなどと言語學者からの槍が来るが、正しい文法のてにをはのと理で行かなくともよいから、詩人たるものよろしく感情でゆくべしだ。昔もア行は廣厚、カ行は堅牢、サ行は窄少、タ行は剛直、マ行は渾融、ナ行は和順、ハ行は變更なぞと斷定した人があるが、すぐアの鮎はいかん。泡はいかん。カの香。幽か、風、霞はどうだといふ風にやつつけられた話がある。鮎が廣厚とも云へず、香や霞が堅牢ではないから、字劃で解釋すると日本語は失敗する。さうかといつて平田篤胤の神代文學や出雲の石窟文字をもつて來ても根源は解らないのだから、まづ自分でこの五十音韻を誦へて、古を偲び現在を活轉させなければ駄目だ。

その點で萬葉や古今の助辭(てにをは)といふものは、日本本然のものらしい、又實によく縦

横に使驅されてゐて、今の詩歌人の模範とすべきだが、歌人のやうにそのままけるかも使用してゐるのはたまらない。僕はよく人の詩の語尾を氣にすることがある。そして朔太郎、犀星、二君に感心したり、よ、だ、る、し、などに苦心したものだつた。行くよ、行くんだ、行ける、行きし、といふのは一例であるが、今の人の、である。のだ。にももうかなり弱つてゐる。昔のけるかも、かな、がも、かし、こそ、やかなの調子は、何といつても日本の音韻を燦然と生かしてゐるのに頭が下る。特にもの字をとつて見ても、もはムオの二音から成り、ものにまつはり、着く形とあつて、藻、裳、茂、百、諸、母、にあてて、その音義と字義を二つながらよく生かしてゐることである。

七

支那でゆくと實字と虚字で、野、丘、山、峰、嶽、嶺と實在の形象を區別し、虚字にしても打つ、扛つ、撃つ、搏つ、と、手でうち、木でうち、はぢきうち、自體でうつなどと字を區別し、行くは行つたり來たり、往くは往つたきり、などと分けてあるが、日本は音韻でゆくから、行くも往くも字で區別がないところが不便でもあるが、ものの具象と舌端の形象とを似せ、聲律と精神とが一對して進み出すところが、より有機的だとも云へる。それを感じないと日本語の有難味

が解らないやうである。

然し現代にゐる僕達は、この複雑してゐる心象なり景物を現はすに、決して日本の古語ではあらはせないことを知りすぎてゐる。故に僕の議論でゆくと、音樂的なる、精神的なる詩的なる點で日本語源に立脚し、漢字でもローマ字でも勝手に使用した方がよいと思ふのだ。又この混成時代に、その粹をとつて新らしい様式なり聲律をつくつてもらひたいといふ意味でいふのだ。びん／＼といふ音律的形容詞が必要であるとすると、ピン／＼と書く人もあるし、又 Bin—Bin とやる人もあらう。又孤鼠々々といふ時に、コン／＼、こそ／＼。如鷺々々といふ時に、にょろ／＼ニヨロ／＼、Niyoro—Niyoro—はむかし。びん／＼は Bin—Bin がよく、ニヨロ／＼はにょろ／＼がよろしい（僕の感覺でだ）。

かといつて、平假名ばかりで國粹的に詩をかく人もあるが、あれも活字で讀むと眼がつかれて不便だ。「けふ、ぼくはこうゑんへいつた」などとやられるとたまらない。平假名で口語をあらはすなんて愚である。僕はあるローマ字家が、僕の詩をローマ字綴りに直して、「落下した」といふ文句を OCHIKUDATTA とやられたのに閉口したことがある。これなどは習慣と字づらで、ラツカシタと讀むで貰ひたいのだ。その意味で漢字の日本讀みも力があつてよいし、又字劃で畫を描くやうな場合もある。（僕の詩集「深紅の人」を讀むでもらひたい。）

但しおくりがなといふ奴は困る。ケフかキヤウか、チヨウカテフか、實際の口音ではもうえと
 糸の區別も、いとわの區別もなくなつてゐるのだから假名づかひは發音のまま新聞社でやつてゐ
 るのがよいやうな氣がする。「私は」とやる時に「私わ」とやり、「ぢや」が「じゃ」になつてもよ
 いのではないか。しかしサケをサカ、カゼをカザ、カネをカナ、コエをコワと通言したり、云ふ
 を曰く思ふを思はくと延言したりする點は理窟ではいけない。元來日本の俗語は漢字の棒読みも
 あるし、梵語もあるし、神代語の轉化もあるので、一つ／＼の解釋をやつたら何巻の本でも書け
 るわけである。

それに音樂的な又は反射的な形容詞となると耳が違ふから、習性が相違するから、とうてい支
 那の蕭々だとか潺湲とか、駘蕩だとか、熨々とか、もびつたりはしない。佛蘭西人に牛の聲がゴ
 ーンと聞え、猫がロン／＼と鳴くにしても、日本では如孤々々（によこ／＼）愚鷲々々（くど／＼）
 義屈々々（ぎく／＼）帆呂々々（ほろ／＼）破羅々々（はら／＼）などといふのがある。まして
 （のんこのしやんとしてゐる）とか（ちか／＼ともる）とか（のほほんでゐる）なんて俗語にな
 ると翻譯も通じはしない。僕がいつも譯詩といふものをあまりよく云はないのは、さういふ細部

にこそ國民性なり民族性の深い傳統があり、又ふかしぎな呪文や魔術があると主張するが爲めだ。

九

殊に人の名など漢字の棒読みが流行で、日本の古語は廢されてゐる形である。その點で大和言
 葉を主張するローマ字論者などはをかしい。白秋をしろあきと云はねばならず、まさか柳虹をや
 なぎのになどとはしまいが、今日の混成語からゆくと、かなり拙い言葉も昔にかへさなければ
 ならぬとなると滑稽である。自動車の手巾のとすつかり社會的に行きわたつた名稱などは、決し
 て古に通ぜしめる必要はない。日本橋が誰がつけるともなく日本橋と呼ばれてしまつたやうに、
 民間の俚言といふものは、全く地から湧いた聲であるから、うかつに民謡の批判などといふこと
 は出来ない。

さうして言葉といふものの細部を掘つたら、いろ／＼の矛盾や迷障が出てくるが、ここでは特
 に詩藻に限るとして、新らしい人達に考へて貰ひたいといふ事を云へば足りるのだ。そしてよく
 新らしい五十音を濺刺とさしてもらひたいのだ。詩を書くに辭典はいらぬ。五十音をころがす
 聲律と精神があればよいのだ。詩學無用、ただいかに生彩ある、肉そのものの聲を句と聯にちり
 ばめるか、言葉そのものの靈を發くかが仕事である。

露都刊「支那誌」

——一六七八年に於ける——

康熙十五年の五月、西紀は一六七六年だ。北京の客棧で今を盛りの桃李を眺めながら、二人の歐羅巴人が、二人にだけしか解らない拉典語で、水仙茶を喫しつつ愉快に饒舌つてゐた。

清服を着て稍老いた方がデニス・スイットの僧でフェチナンド・ベルビイ、今は康熙帝の師傅、支那名は南懷仁。若い軍服のやうなものを着たのが、露帝の遣支使節ニコライ・スバサリーであつた。

(ボクドイ汗などと云つては君の生命が危いぞ、康熙帝と發音したまへ。)

南懷仁がいつた。

(然し、支那人奴、露帝のことを察漢汗などといふぢやないか。)

(郷に入つては郷に従へだ。君もこの文字の國へ來たら尼果顯と呼ばれるのだよ。)

(糞ッ・ボクドイ汗と云へば、聖なるといふ意味があるが、滿洲の大會長といふ意味でもある。)

(察漢汗といふと支那では…白い大會長…といふ意味にもなるよ。お互ひさまだ。)

そして結局二人は笑つた。

然し側にゐる清廷の官吏には拉典語は解らなかつた。ニコライの隨員であるテオドル・パプロフにもイワン・フェポロフにも解らなかつた。市中では紅毛碧眼の大鼻人が來たといふので、物珍らしく觀衆であふれてゐた。

(實にけしからん、ボクドイの奴隷め、國境からついて廻つて、どうしても露帝の親翰をボクドイ汗に手渡しさせないのだ。)

ニコライは憤慨してゐる。

(否、茲には茲の禮儀があるのだ。その内に教へよう。拜謁を願ふにも三跪九拜といふ奴がある。これをやらないうちは到底謁見はむづかしい。)

南懷仁は若いニコライをたしなめてゐる。

(僕は一年有半も費して、ウラルを越え、バイガルを過ぎ、黒龍江を渡つて、あの沙漠を過かきやつて來たのだ。使命を果さないうちは歸らん。)

ニコライは強硬であつた。

南懷仁はそれをあくまで慰めて置いて、それから希臘人たる個人のニコライと、天文、植物、地理に就いて語つた。彼等は政治的の意味さへなければ純粹なる世界的な學者であつたからだ。

然し國書授受の形式はむづかしかった。

ニコライはあくまで自分の手から國書を捧呈するといふ、清廷側では各大臣が内見してからでないといふ、もし不敬になるといけないといふので承知しない。それを南懷仁がいろいろ仲にはいつて、ともかく親翰は議政大臣の手に渡された。

露帝は支那に親和を求めて來た。國境や土匪の問題で、もつとはつきりと交易して置きたかつた。然し支那が我こそ中國なりと威張つてゐる程、支那を買つてゐない。單に彼はボクドイ汗として會長視してゐる。支那側でもさうだ。鄂羅斯何ぞ、北狄の會長ぐらゐにししか思つてゐない。これには當事者として二人の文化人が弱つてしまつた。で、ともかく國書は捧呈したからといふので、外使引見となつた。

南懷仁はニコライに三跪九拜の稽古をさせた。そしていよ／＼謁見を給はる時が來た。

(もつと叩頭だ、頭が床につくやうに……)

注意しても、ニコライはビョコリとやつただけだつた。

驚いた廷臣が、唳鳴りながら注意すると、二度目も又ビョコリだつた。

それから玉座まで馳けて行つて、ひれ伏して九拜するのであるが、ニコライはちよいと兩手を下げただけであつた。

そのあとで東洋風に脚を組んで、敷物の上に坐るのであるが、ニコライは兩手を四五回ぶらさげて九拜の眞似をしてゐるうちに、とう／＼すべつて、つんのめつてしまつた。あつといふ内に彼は玉座の下へ轉がつた。

(……………)

一代の俊傑康熙帝も、謁見は許したがお言葉はかけられなかつた。

そして甚ださびしく朝見の儀式は終つた。

超えて七月、清涼の夕、又も南懷仁の斡旋で、ニコライは賜餐の席に列した。

明敏なる康熙帝は、この遠來の使節が、相應の學者であり文化人である事は認められたが、彼が決して政治の器でないことを知つた。

ニコライの隨行員で、同じく希臘人であるスピリトン・エバステイエフは寶石の専門家であり、同じくイワン・ヨリエフは藥物學の専門であつたので、帝はニコライにも寶石と藥物の話のみ尋ねられて、一言も露支國情の問題には觸れなかつた。

紫石英について、火珠について、辰砂について、南懷仁とも暫く談じられ、次で藥石の話に移り、帝は

(中國の土は藥用になるから、馬に積めるだけ持つてお歸りなせよ。)

といった。そして食用土について、深山の新水について、春雨水に就いて、その造詣を語つた。
ニコライは熱心に、南懷仁の通譯で、帝の話を筆記した後、これもウラルからシベリアで蒐めた植物や土石の話をした。

帝はやがて満足相に

(卿は金爪星を御覧になつたことがおありか。)
と訊ねられた。

金爪星、南懷仁は金の爪の星と譯してニコライにいふたが、ニコライは知らなかつた。

(まださういふ星を仰いだことはありません。)

(では、あれを御覧なさい、なんと美しい星ではありませんか。)

さういつて帝は、城苑の上に出てゐる美しい月芽兒ハツコを指され、會釋とともに席を立たれた。

(帝は詩人でゐらせられるのですよ。)

南懷仁も笑つたが、眞面目なニコライには、三日月を金爪星と洒落た帝の心持が解らなかつた。そしてすごとくと客棧へ歸つて來た。

迎接の廷臣からは、奴隸として美人が送られ、相應に歡待されたが、ニコライは喜ばなかつた。

(糞ッ、いつまで待たすのだ、いつ親翰への返書してくれるのだ。)

然し又も授受の形式に於て、兩者は一致しなかつた。清廷では露帝ツァーデルへの贈呈物と國書は出すが、その使節たるもの又も三跪九拜して、これを御受けしなければならぬ。ところがニコライはそれにはもう懲りてゐるから、

(露帝はボクドイ汗より高きものだ、故に漢文で書いてあつては何の事か解らぬ、よろしく拉典ツァーデルで書いて届けるのが本來だ。)といつて譲らない。

清廷では大臣會議が行はれ、次で三ヶ條の文辭と、露使は即刻退京すべしといふ嚴命が來た。文にはかう書いてあつた。

——中國の傳統と會議は左の三項を決する。

一、如何なる南蠻北狄も、中國に來たからには、低きところより高きところ來たもの如く、何某の主權者の使者の何某は、帝の高められたる玉座の下に平身低頭して來たものとして、奏聞に達する。

二、如何なる蠻國からの獻上品でも、それは贈物でなく貢納として取扱ふ。

三、その返禮として何か與へる時は、その奉公の誠實を嘉賞される意味に於て、これを遣はされるのだ。

そして獻納品の返禮として、恥かしからぬ御下賜品が届いた。更に退京嚴命には天に太陽が一つあるやうに地上には我が帝より他にはない。帝は世界の諸王星を率ゐてゐられるのだ。ニコライよ、歸つて汝の主人に左様傳へるがよい——といふのだ。

これには流石のコスモポリタンの南懷仁も術の施しやうがなく、時期猶早しと見て、ニコライを歸すより仕方がなかつた。

（然し、歐羅巴と支那をつなぐ線は三つある。一つは海路、一つに中央の沙漠越え、もう一つはシベリア經由だ。幸ひ君はこの路を拓かれたのだから、もつて歐亞文化のために嘉すべさだ。）といつて慰めた。

（よし、それなら黒龍江河畔のガルヂムール族と共に、あの廣漠たる國境を征服してやるぞ、コザックの精銳はきつとそれをやり遂げるだらう。）

ニコライは使節の本分を全うしなかつたが、相應に支那側の現状を視察し、九月三日に北京を引拂ひ、又シベリアで越年して、一六七八年に露都へ歸つて來た。

が、不幸にしてその時は、露帝アレクセイ・ミハイロウツチは薨去の後であつた。

（残念です。ベルビイ、黒龍江全般は遂に露帝のものにならない代りに、僕は植物誌、土質、風俗、氣候等について廣般なる支那誌を書く。これが結局僕等學徒の勝利だ。滯在中のお禮を

申上げる。）

ニコライは南懷仁に宛てて、さういふ書翰を書いた。

詩花一體

どうして君は詩をつくるか、詩は何であるか、詩はどうして作らねばならないか。幾回くりかへしても問ひはこの一點である。即ち僕の答へも只一つ。詩はおのづから花の癸くやうに作られると。僕は木である。春色あまつて僕は詩と癸くのであると。

夏來らば川のやうに、秋至れば雲のとぶま、冬來らば風の弾力のやうに、思ひ、感じ、傷み、熱して詩をつくる。詩は呼吸である。もう一つの肉體である。さう、肉體、しみくこの頃はそれを感ずる。詩が精神である、正しい理であり眞實であるといふ考へは、もう僕にはない。詩を書くのは不正である。間違つてゐる、最高のものではない、乃至は非人情であると云はれても、僕は猶詩をかきつづる。詩は僕の病ひである、狂信ですらある。殊に春、春來る毎にこの感が深い。あさましき俗外狂徒は、詩によつてわずかに世に處し、世界に關係してゐるのである。従つて僕は肉體そのものとして詩を肉付けする。運動させる。

言葉は僕にとつての細胞である。どうして粗路に出來よう。近事、僕は詩に於ける形式論者に組してゐるやうに見られてゐるが、字句のやかましき、聯の關係を云々するのは、詩が一つの立

派な肉體として、世界を映象し、自由自在に使驅されるやうにとの心掛けからである。一字の無駄は全句の傷である。一句の錯誤は全詩の呼吸の停止である。聯の混濁はその詩の致命傷である。傷けたくない、呼吸を苦しめたくない。ましてその詩を殺してどうして快い事があらう。精神さへ出れば、ノイである。肉體が歪められ、傷けられてゐて、只精神だけが完全にのりうつる理由はない。古い精神的獨斷をやめよ。それこそ非精神的である。わるい宗教感を藝術感に轉化せしめたものである。

詩は完全にまで美體でなくてはならない。鶯の婉曲繊細なる、桃の豊艶なる。李の清奇なる、天然にまで肌膚の堆積と盈量を完全にしなければ、生けるものの髣髴たる情感がのりうつりはしない。従つて言葉と旋律と又聲調を輕視する人と反對する。僕は擬古的にまでに、更に未來にまで完美論者である。その格と韻はおのづから別れよう。しかし木の葉は木の葉らしく、短銃は短銃らしく、山は山らしく表現してこそ均齊はあれ、無關矢鱈と怒號したり、又ぬるくとしたり、言葉と力に囚はれての主張はあきたらぬ所である。故に詩に他の主義主張あるを採らぬ。借りものの威嚇あるを好まぬ。言語一致、悲しみに傷み喜びに狂ひ、水月鏡花、天地の情奇のままに在りたいのである。どうして鶯は囀るか、肉體は生き動くか、理論は禁ずべし。詩には鶯の、肉體の、そのままに存すべき秘密と運動が與へられてゐるのである。

故に詩に肉がなければならぬ。花に花肉が存してゐるやうに、その匂ひやら水やらが肌膚を完璧にまで表象してゐなくてはならない。花の影、暗示のみでは足りぬ。二花一莖である。語葉の鎖と、句の主格とが一つになり、句の聯が最後まで神経を通じ、紅い血管がほの見えてゐなければならぬ。故に抽象は採らない、語葉の分銅に均齊を持たぬものは採らない。意重くして語葉の拙なる、語葉勝ちて意うすきもの、單に典雅なる、流麗なるもの、怒號、泣哭するものは採らぬ。詩には生ける花の情感の如き、その如實の興趣、所謂感興の波がなくてはならない。ねばねばした美でもよし、どろりとしてゐてもよし、さらさら、むらむら、づきづき、何でもよい。花蓋のやうに、花が變るやうに、動物のもつ、情熱のもつ、現實の非認識なものから、おどおどと、めき／＼と意興の情感に昇華して來て、語葉となり句となり、その語葉と句が又現實の眞諦をよく表象したものであるなら、それが艶であり奇であつても、今の僕には面白いのだ。

さう、艶でありたい。凄奇ですらありたい。ふかしぎなる情感を刺戟するもの、或は夢ですら詩花の肉體をもつてゐるもの。即ち抽象でなく象徴めかず天然の認識から花と癡きでしもの。今はそれ一點である。春色彩華、清遠奇なるもの、無爲にして爲すなきものの主體として、僕は詩花一體を主眼とする。幸ひに人の單に比喻とのみ見る勿れである。

音 韻

僕は色彩にあきた。

色彩によつてかがやき、色彩によつて明暗極りなき、詩の認識的魔術にあきた。僕からはやがて色彩の幽霊が、老いゆく秋の鶏頭の如くたちのぼらう。

僕は匂ひにあきた。

匂ひによつて常に新らしく、又鮮かな季節の感覺が、僕の詩に清芬たるものを與へてゐた、その詩的要素もやがて深山木の雪の匂ひの如く朽らはてよう。

僕にはふしぎな客が來た。

かれは音である。響きである。世界の貌は色相を失ひ感觸は擦り古びた。新らしき客は僕の耳を襲ひ、僕の心室に不可解なる受信機を設計した。

古い日本の五十音圖。

僕は五人の母音を見た。續いて九人の父音を見た。世界は音韻として僕に反響して來た。

混沌と極地に立つて、五人の母親はふるへてゐる。九人の父親は、五人の母親に觸れ手を結び衝

き抱く。そこにこよなき子音が生れては飛び翔ける。かれ等は僕の中へ世界を運ぶあたらしき通信者である。

僕はかれ等のする仕事を眺めてゐる。

本音たる五人の婦、横韻たる九人の男、かれ等は漢音を虐げ、羅馬字音を征服し、今、僕に直響する世界の混沌の音語を、神秘なる施術によつて翻譯してくれる。僕は今、あたらしく時計の音をきき、鳥の聲、犬の聲、機械の響き人の會話、木の音、金の音、牙音、清濁の韻を聞くであらう。

僕には音楽への靈煤者がやつて來た。

僕は音韻によつて、色彩的文字、形容詞、又生ける動詞をつづらう。美しくも深き五人の母親、神秘にして精悍なる九人の父親。かれ等は日毎僕に、新大陸たる音韻の世界を近づけてくる。

花と葉と

ある種の植物をみると、花として用意され、花として光りと大氣を呼吸せんと、植物自身の智能によつて發育して來たものが、氣温により、榮養により、或は周圍の眼に見えぬ自然作用によつて、花ならぬ葉となつてしまふものがいかに多いかに驚かう。

詩作心理も、正にその花と葉の發生作用の理に依つてゐる。日常僕らの内部の感觸は、不斷のラヂオ、光星と暗星との二重回轉、不規則なる軌道を往く彗星も愚か、靈智の郵便局、時間と世界の中心であり、萬象を認識し、受用し出發する生のステーションである。しかも詩文なる花を製出せんとして、多くも葉を簇出し、混亂をきはめてゐるもの、僕らの生活心理でなくて何であらう。

ああ、千百の花は、千百億の葉の上に舞ひいでたるその植物の靈智でなくて何か、又詩は日常生活の二重三重の心理學的刺繡でなくて何か。しかも感覺と感情との川に於ける撰まれたる美の姿にして現象の座に於ける天使、その境涯の透明圖である。而して僕らは、この花の發生と結果とに始終して遂に多くの葉を暗中に棄てつつ、いかに無爲の時間と力とをたはめつつあるか、か

くて葉は萎み、枝は疲れて冬の風に鳴らう。

詩は花である。生活は葉である。かの植物ですら天の作用に、この神秘なる區別を地に置いてゐるにもかかはらず、君は神の眼はまだ花と葉を同視するてふ諦観に座すか、然らば君は千百億の葉の葉たれ。

歌謠 厄拂

この二、三年といふものちよつとちよつかいを出したのがもとで、いつの間にか僕は所謂歌謠なるものをやるやうになつてしまつた。やつて見るとこいつは手つ取り早くつて、妙に氣がせいとおまけに知らぬ間にめしの種になるには驚いた。いや少々うしろめ氣もするが、今日ではやゝ馴れて来たものか、案外平氣になつて、先方のチャーナルの要求に従つてどん／＼やつて見るやうになつて来た。

かういつた寄席藝當だ、いやむしろラジオ・レコード藝だ、誰にだつて、ちよつと意識と趣味があればやれる——と思つてゐたが、やつて見ると相應に亦むづかしいものであることも解つて来た。それは歌謠といふものが、全く獨立では何の役にも立たないところからくる。音楽にのつて、舌端に躍りころげる歌詞といふものは、獨立では作者仲間以外に價値をなさない。死んだ科白みたいなものだからである。こいつは詩を書くやうに特殊でない、あくまで普通性で行かなければならない。作者などはどうでもよく、いかによく大衆のものとなり得るかといふところに價値が置かれる。

詩は思惟する、普通の中から特殊を切りとつて来て、醇なヘルツでこねて、文字に一種の贈懷をもつてさへ書かれる、そこに個としての生みの喜びが湧く、一つ會心の詩の書けた日はうれしい。塵芥の中からもかくも寶玉を見附け出したやうな心地がする。今の世の中で、それが賣れないのは當然で、パンがありさへすれば、先づ詩集に入れて、讀む人だけに讀んで貰へばいいといった調子ですましてゐられる。

ところが歌謠なるものは、先づ音楽を見つけて、その姉の手によつて空間をとび、眼よりも耳に入るといつた原始的な表現をとる。こいつは「空間の妙薬」である。口から口を渡る輕業師であるから、その生みの親たるもの、山中で行ひすましてはゐられない。いかな劍法も人を相手にしなくては成立たないから、先づ町道場だ。市井へ出て、エイヤツとやつて見せないと、お立會たる熊さん八さん、ミイちゃんキイちゃん、お鳥目を投げてくれない。そこが商賣だ、商品歌謠の製造者、到底詩人たるの日はない。あくまで市の馬の眼をぬくくらゐにやらなければ追付かない。そこが亦おもしろいところでもあり、めしの種になるところだ。

従つて、自分の作詞に曲がついて街頭の小僧さんが唄ふのを聴くと、へえ、あれが自分の作か——と自分でへんに思ふ。どうも自分が書いた氣がしない、特徴がない、嗜好がない、趣味がない、誰にでもあてはまつて、よく解る歌詞だからだ、いや文句だからである。作詩といふのは

鳥辭がましい、作詞だ、文句でよいのだ。會社の文藝部なるものが、文句でよいといふのであるから、あくまで文句主義だ、詩があらうが無からうが、それは作者の心の問題一つである。といふところまで来てゐるのが現在である。

そこでよくシネマの主題歌などといふ、ヌエ的存在物が注文されてくる、ストーリーの原作者なども手を出して、その筋を歌にする、監督が文句をいふ、レコード會社が亦修正を申出る、そこでシネマにも、レコードにもいいやうにして、流行歌として賣出される。時には小説、レビューの主題歌も出る。お次が土地の民謡、何々よいとこが出る、お次が抒情歌曲、戀、涙、それから近頃は亦古民謡の模倣、草津、おはら、おけさの模造まで出てくる。これを總締めにして、放送局が歌謠曲と云つた。うまく云つたものだ、俗謡、書生ぶし、艶歌でなくて、歌謠といふ。昔ながら歌とは何か、謠とは何かとむづかしく云ふところであるが、今日では早く解りさへすればいいのであるから、誰も反對しない。

ところが亦、外國ものの翻譯から來た舌たらずなもの、ややお上品に書く歌謠があつて、ソプラノやテナーがよくアチラの句調で唄ふ。もうあんなものはオペラ以外によした方がよいと思ふのだが、山の手趣味でいつもこの西洋基調のヘンな存在があるのだから致し方がない。

そんな意味から、歌謠作詞者といふものが特に一つの商賣になつて來たのは、これもお時世の

恵みであらう。レコード藝術といふ名を借りて、そこに作曲、歌手、作詞の人々が集る。そして仕事をやる。さてむづかしいといふのはここだ。それ軍歌だよろし、次は校歌だ、會社の宣傳歌化粧品の廣告歌、何々村小唄だ。次がおけさ、さのさ、籠の鳥だ。かうなると、先方の注文によるから、虚心淡々として、然も亦執拗に、出来るだけ普遍味を持つて、古い文句を咀嚼し、換骨脱體をやらなければいけない。コクトオの文句ではないが「古くから誰も解つてゐることを、今初めて解つたやうに新しく」書き改めなければならぬ、これが作詞の祕法である。

故にいかにもその文句が賣れて廣まつたところで、決して作者の名譽にも喜びにもならない。只めしの種になるばかりである。そこにはもう創作的オリヂナルが無いからだ。發見もなく、驚異もない、従つて誰にでも作れるから、若い人がよく雑誌を出して、歌謠詩人といつて商賣を初めようとする。そして盛んに作詞するが、オリヂナルが無い、ある一定のレベル以上に出られない。こいつは全くお同様に氣の毒見たいなものだ。その四苦八苦が作詞のむづかしいところである。

では君はあくまで歌謠には進歩がないといふのか——と訊かれると、僕は先づないと答へるより方法がない。變化はある、しかし進歩はない。もし進歩さしてしまつたら、大衆は附隨して來ないのだからだ。單獨の作詩に終つてしまふからだ。そこで西條八十のいふ——作詞とはコッさ

である。

このコッだ、いかに從來あるものを、今出來たかに見せるコッだ、技術だ、由來人間の口邊に漂ふ唄といふものは、それが箴言や經文でない限り、最も容易な、最も通俗であるものが、花のやうに群がつて、女子供をうれしくさせるのだ。この子女をして憫々として泣かしめるの味は軟文學の特質で、今の大衆小説なるものと同じである。

そこでコッを心得た者が、一つの作詞をすると、多少の個性をにじませて、新らしく見えるものを書く、然しそれは大衆小説の股旅ものと同じく、新らしく見えるだけで、内容に於ける進歩、發見はない。せいゝ改作程度の表現の新らしさであつて、人間精神がもつエスプリ・ヌポールなるものに乏しい。従つて彼は創作者でない、思想文學の先進でない、いつも悲しい微温の町の作者であつて、やつぱり小唄づくりのデレツタンチスムを地の商賣で行くのみだ。

といふと大に作詞家をけなすやうにとれるが、以上先づ大に悪く云つて置いて、さてこれからどういふ方針でやればよいかと——いふのが僕の尋ねたいところだ。君は現在のままでよいと思ふか、變化の流れに従つて、カメレオンですましてゐればよいか、まるで波止場の商賣女のやうに——否、然しだ。

どうせこゝは町道場だ、あらゆる曲藝もやらなければならぬし、又道場破りがやつてくると

ころであるから、もつと頑張つて、作詞工場の基礎を固くし、新製品も賣出して、姉妹會社の作曲、レコード、ラジオをやつつけなければならぬといふことだ。それには先づ自身が少しはうれしくなるものを造らねばならない。ダイヤの粉も少し入れて、表面より裏が光るものをつくる。マーケットで苦情云つても、何とか押通す、來年からはその意氣でやらなければ、到底近いうちに僕達は皆滅だといふことだ。

以上本年度の厄拂ひ、歌謡商賣懺悔のトクさを先づ仍如件。

最近歌謡談義

最近、放送局あたりが命名したので、やつと歌謡といふもののチャンネルが、一般にはつきりして來たやうである。尤も歌謡とよばれる形式は、非常に古くから日本にあつたものでつまりはリリックな詩であつたのであるが、その時代々々でいろ／＼と變化して來たから、他の和歌や俳句のやうにはつきりとしたチャンネルを一般に認識せしめることが出來なかつた。さうした古謡が神代から室町時代へかけて、種々な名でよばれてゐるうちに、いつか民謡といふやうな庶民の唄になつて來た。

明治の新體詩時代になつても、その形式を學びながら、自然にリリックなものから離れ、文學の詩になり、口語體になつても依然として、ます／＼歌謡の本質から分離し、遂に今日の詩は眼で讀むもので、口唇で反轉愛誦するものでなくなつてしまつた。従つて今日の新しい詩人に云はせると、歌謡は詩ではなく、卑俗な音樂的文句でしかないといふことになつたが、これは非常な間違ひでなければならぬ。尤も極く卑猥な流行歌までが、一概に歌謡とよばれるやうになるのは考へものであるが、然し歌謡も詩の一チャンネルであるといふことを認識出來なければ、これ

からの詩の發展性といふものが無くなるではないか。今日、若い人の作る詩は仲間だけが讀むだけだ。これを一般に傳達しようといふには、どうしても眼よりも口から、つまり音楽的な空間作用に據らなければならぬ。そこに歌謠といふものの新しい意義が、今日の時代に存在權を持つやうになるのだ。

詩はもつと朗讀され、愛吟され、愛誦されねばならぬ。敘事的なものにしても、抒情的なものにしても、今迄のやうに單に小曲的な、雜誌の埋め草的なものであつてはならない。小説の原作がよく劇化され映畫化されるやうに、詩もオペラ化され、或は音樂化され、そこに渾然とした歌謠の本質的使命を果さなければならぬ。が然し、實をいふと、この實行といふことが、今でもなか／＼至難なことで、本質的に詩のために生きぬかうといふ人々が、うかつに手を出さない理由はたくさんある。それは、第一に流行歌の運命のプロセスを経なければならぬといふこと、即ちマーケットに出すこと、音楽家と結ぶこと、次でレコード會社などに關係しなければならぬこと等々である。更にさうするには、もつとリリックに、調子をつくらねばならぬ。何かしら独自の定型がなければならぬ。つまりそれが妥協的で厭だといふこと、日本語の貧困から、文口兩語で巧く自他の融合が出来ぬことなどに歸因してゐる。そしてより極端になると、自己の幽玄なる、或は雄渾なる、流麗なる、独自の詩想といふものは、到底大衆に理解されるべくもなく、百年

河清を待つ如く、極く少數の讀者があればよいといふ諦めである。これがまだ今日の世界にも、詩人をして象牙の塔に籠らしめる癆の原因でもある。

然し、そんなことを云つてゐるうちに、時代はます／＼變化し反轉して、一般社會は獨りよがりの、到底理解すべくもない個人的なポエジーよりも、大きく、明るく、たのしい國民的なものを要求してゐるのである。このことは、最近十年間の流行歌の變遷などを見るとよく解ることである。もちろんうはへは卑俗な、カフェー的、寄席的、キャバレー的なものが歡迎されてゐるが、然し徐々に本質的なものも購買されて來たのは喜ぶべき現象である。それもこの五六年間の各レコード會社の新譜を見るとよく解る。つまり一般大衆は、突然に本質的な詩などは要求しないが、人間的に本質の聲なら聞きたいといふ欲求は持つてゐるのである。そこで滑稽なことには、流行歌で窮々としてゐる營利本位のレコード會社などが、これはどうか、これならどうかと、種々な種目を作つて提供するが、結局、衆愚か衆賢かといふことは解らぬ。全く水物だとしてゐる。そこが面白いではないか、實際、どんなにくだらなく見えても、大衆が飛びついてくる程のものは、どこかに民族的な、音楽的な、或は率として抜くべからざる、人間的な本質の味を擱んでゐるものなのである。そこに文化の波がある、時代的な色彩がある。

早く云へば、今日の大衆は、もつと他の文化に併行した歌謠が欲しいのである。大勢で唄へる

もの、酔つて唄ふもの、獨りて唄ふもの、それ他いろ／＼に口誦む歌が欲しいのである。老人だつていつまで漢詩の明吟や、新内常磐津に閉籠つてゐたくは無からうし、山手のマダムも下町のお内儀さんも、田舎の女學校の先生も、何か欲しいのだ。只學校の唱歌や長唄だけでなく、もつと直接に胸を打つものをやつて貰ひたいのだ。冠婚葬祭についても、四季の變化につけても、もつと世界的に、國民的に、文化と藝術の恩恵を受けたいのである。そこに人間性の祕密がある。つまり詩もこの祕密の根本の微妙なものに觸れたものでなければ、到底長く人間を捕へることは出来ない。實際に今日の文化も藝術も偏してゐて、なか／＼黄金時代といふものの現出しないのは、この根本の供給が缺けてゐるからだ。

今日、この文化と併行して唄へる紳士の唄がない、大學生の唄、中學生の唄、勞働の唄、工作の唄、戦争の唄、平和の唄がない。喜びの唄、眠りの唄、結婚の唄、愛の唄、泣く唄、怒る唄もない。そこで仕方なく、歌曲をやつたり、劍舞をやつたり、民謡小唄をやつたり、校歌、軍歌、團體歌などを唄つて胡麻化してゐるが、現在のままではどうにもならなくなつてゐる。小説も劇も映畫も、この要求に答へようとしてゐるのに、詩人ばかりが働かうとしないのは、自繩自縛といふよりほかはない。詩が稿料にならず、菊池寛あたりが滅亡論を口にするのは、尤至極の現象である。全く口をこそ出さないが、編輯者も讀者も、今日の詩が面白くないのだ。況や社交婦人

に、大臣に、重役に、スポーツマンに、ショッパガールに、詩が解らないのは當然である。解るやうに表現してやらないから、いつまで経つても解らないのだ。

かういふと、宛然小説組合のやうに、純粹派と大衆派と別れ、僕の意見などは大衆詩人の寢言ぐらゐにしか響くまいが、然し、この頃僕が矢張り歌謠的なものを書くのは、相當に故あつてのことなのだ。第一に純粹な、個人的な詩ばかり書いてゐると、どこの雜誌社でも買つてくれぬこと、つまり物的生活が出来ないこと、次には、もう僕等は二十年も個人的な詩を書いた。僕の持つてゐるポエチーはほぼ出きつてしまつた、後は次の時代の人と入れ代らなければならぬといふことである。どんな詩人でも、もう三冊の詩集を出したあとはそれ程のことはないといふのが僕の持論である。小説や戯曲は、描寫の場面が廣いから、相應に多作しないと、その作者のコスモス観がはつきりしないが、詩は省略の世界である。ポイントで表現する端的なものである。故に三冊も書いたら、その詩人の持つてゐる特質は、必ず出てしまふものだ。あとは全くの餘物だ。只、從來の手法と内容の延長にすぎぬ。メダや生物突變説なら知らぬこと、人間はそれ程變化は出来ても、進歩は出来ぬ（本質的に）と僕は思ふ。従つて僕はもう僕だけのものを、善かれ悪かれ吐露してしまつた、後備の年齢と役割になつた。そこで少しは社會的に、たとへそれが謂ふところの消耗品であつても、一時的、花火的の効果しかないものでも、一つ罪亡ぼしのために

も書いて行かうといふのが、先づ僞らざる今日の心境である。この結果は今日外國でも同じことで、ポール・フォールなどが餓死しようとしてゐる不幸も、只純粹に自分の詩の延長ばかり心掛けてゐる結果である。若い時分は詩を書いて餓死する勇氣があつた。亦それが詩の名譽とも思つて頑張つた。然し僕はもう僕自身がそれほどの詩材と思はなくなつたから、山から街へ下りて来た。

街へ来ればいくらでも仕事はある。結婚の唄が只高砂やばかりではもう仕方がない。葬禮がバイブルや經文の暗誦だけではどうか、學校が文部省の歌ばかりで、一般がお國自慢の民謡で、レコード流行歌で、そこに反轉はあつても進歩がない。他の文化との比例がとれない。これは詩の不生産に原因するのでなく、詩的國民性の屈辱でなくて何であらうか。僕等で今日の歌謡を改めて書かうではないか。郵便局の唄、航空局の唄、ステーションの唄、インターナショナルな唄、東洋の唄、世界の日本の歌、それを實際に電波しようではないか、それが爲めにこそラヂオはある。レコードはある。營利に顧使されず、相互の利權によつて、詩の實施的行動に就かうではないか、そこに詩の一チャンネルとしての歌謡の使命と意義が出て来る。今日歌謡詩人が、純粹派から輕蔑されてゐるのは甚だよろしくない。純粹派は稿料をとらないから、やれ卑俗だ、妥協だとお高く止まつてゐられるが、實際その仕事の第一線に立つてゐる者の苦衷は相應なものである。

そして誰もがその苦しさを訴へはしないが、とにかく一年と小唄も流行歌も民謡もよくなつてゆく。これは我田引水ではなく、文化的基準から照らしても明らかで、僕の今日云ひたいことは、山手に納つてゐる詩人よ、もつと丸の内へ出ろ、そして僕等の戦つてゐる戦ひを後援してくれといふことだ。

詩を低下せしめるといふことと、詩を社會文化の基準に併せしめるといふことは違ふ。ケタを下げる、賣れ、廣く俗物にも味はせろといふことと、詩といふものの本質を安賣することとも違ふ。これはもつとくはしく論ずべき性質のものだが、要はその内容と手法だ。手法さへ發見されれば、あなたがち従來の形態に據る必要はない。そこに新しい定型が發見され日本詩の往くべき標準が確定する。只、その過程として、歌謡の道を往くことが、今日いよく詩をして生活基準に併行せしめるの術ではないか——然らば大にやらうし、亦諸君にもやつて貰ひたい——といふのが僕の願望でもある。

戦線見聞記

浦口の宣誓式

上海までは飛行機、杭州へはガンリン・カー、蘇州から南京へは汽車で行つたが、南京から先は主として汽船か軍艦で揚子江を遡らなければならぬ。この航路では必ず敵に撃たれるといふが、もう既に私達ペン部隊は杭州の錢塘江で、敵弾の技倆を見て來てゐるので、何程のことやあらんとみんな意にも介せず輸送船へ乗込んだ。

その時である。いよ／＼潮江間際になつて南京の對岸、浦口の埠頭に立つと、そこで非戦闘員である船員諸君の宣誓式が行はれた。海軍各部の將官が立會つて嚴かに勅諭を讀み聞かせ、一人々々名を呼んで署名させ、今から帝國の軍屬であるから、各自部處について、未練の振舞ひのないやう、あくまで働いて貰ひたいといふ訓示があり、一同軍旗の下に誓つた。船員の中には二十歳の者もあり、五十歳以上の者もあつたが、皆欣欣然としてこの名譽ある宣誓に参加してゐた。

その前を落ちたら決して死骸は揚らないといふ、大揚子江が流れ、帝國軍艦が嚴然と江上を警備してゐるし、南には紫金山が紺碧に霞んで、西方江上には茫漠として太陽が輝いてゐる。私達

はこの劇的シーン見て、初めてこれから前線だぞといふショックを受け、大變に感動した。それは私達もこの船員諸君と同じく、生命を賭して、皇軍と共に前線へ進むといふ、眞剣な武者振ひである、私はその中の最も若い船員の一人に、そつと郷里を訊いて見ると福岡だと答へた。

この三十餘人の船員諸君によつて、私達の乗つた〇〇丸は浦口を出帆し、一路西へ／＼と揚子江を溯上した。日没になるとすつかり燈火管制を行つて、江上に假泊する。その翌日の正午になると、いよ／＼殘敵が蟠居してゐる場所を通過する。船上には二門の〇砲があり、八人の砲兵さんが乗込んでゐて、先づ小銃で敵の有無を探つた。初めの場所では答へがなかつたが、次の銅陵といふあたりへ來ると、もう一艘二哩ばかり先航してゐる〇〇丸といふ汽船が、左舷の山から撃つてくる敵弾を、二發受けたといふ無電がはいつて來た。

それといふので、砲兵さんは砲座に着く。前線へゆく兵隊さん達が敵陣を覗く、船員諸君は各自部署について船はフルスピードを出す。その内にとどんといふ砲聲だ。見ると左舷の前方にわが〇〇艦が一隻現はれて、私達の船を援護するために、敵陣を攻撃初めたのだ。(それ、來たぞ)(あつ、水柱があがつたぞ)(敵はあの山の中腹だ。)といふ聲が上甲板でひびく。やがて私達の船へも敵弾がとんでくる。今は敵の彈道の射程へ完全にはいつたのだ。

前甲板の砲座からは、とどん、ぱり／＼と砲兵さんが應戦する。敵弾が一發、その砲座の土囊

を破つて、吃水線近くでばつと水柱をあげる、(野郎……)と叫んで、砲兵さんは連続に撃ち出す。私達はその味方の砲撃の音でふら／＼するし、危くつんのめりさうになる。全く夢中だ。その内にます／＼交戦は激しく、敵の迫撃砲弾がビュウ／＼と船をとび越す、サツト水柱があがる。(船長、機関部へ一つ来ました。)といふ聲がしたが、幸ひこれは不發弾でよかつた。この船には前線へ届ける貴重な軍需品が満載されてゐるのである。

この交戦は約四十分続いた。そして敵弾は約二十餘發本船の近くへ来たが、先づ被害もなく元氣で敵前を通りぬけた。私と同行の久米さんとはその破片を一つづつ拾つてポケットへ入れた。そしてその晩は又江上に假泊したまま、船員諸君と無事を祝ひつつ、砲兵さんの働きに感謝した。武器こそ軌らないが、かうして船員諸君も闘つてゐるのだと思ふと、實際嬉しくて涙が出た。

九江滞在

海軍班は軍艦で進んだが、私達陸軍班は、江北戦線へ行つた三四人の人以外は、この船で四日目に九江へ着き、そこに二週間もゐて前線と後部をとび歩いた。

安慶は船の都合で立寄りなかつたが、蕪湖と湖口へは着いて、いろ／＼と兵隊さん達から戦闘の様様をきき、又各部隊に招かれて、敵状を聞いたり、特務機關、兵站部、衛生班、馬糧班など

の苦心を見たり聞いたりしてゐた。

その中には捕虜の話もある。機雷の掃海に殉じて殞れた勇壯談もあるし、無言の戦士たる病馬の話もある。又捕虜が皇軍の仁愛に感じ、自ら進んで皇共維新隊といふものを作り白鉢巻に日本刀で、是非前線へ出してくれといふエピソードを聞いた。

然しここで最も感じたことは、蒋介石の憎むべき謀術で、退却に際して、街中の鍋釜とか、印刷機とか、必要のものを悉く破壊し、あまつさへ自國民の汲む井戸へコレラ菌やマラリヤの病毒を遺憾なく投入して逃げたことである。これには皇軍の兵隊さんも多少やられたが、自國民たる支那人がバタ／＼斃れた。一日二三十人も往來で倒れる。水がない米がない。晝は熱く夜は寒く、女子供の泣き叫ぶ聲は天へも届する。敵を追撃してこの街へはいつた皇軍も、これには手のつけやうがなく、先づ第一に衛生班がとび込んで、八千人からの支那人に豫防注射をしてやり、文字通り不眠不休で働いたので、やつと四日目からはコレラも下火になり、一ト先づこの難民を一ヶ所へ收容して米と鹽を與へて宣撫した。

それが爲めに、己れの身を忘れて、只敵の民衆のためにと注射してやり、自分の分がなくなつて、惜しくも天職に殉じた勇士もあつた。更に十六名の特志看護婦たる白衣の天使は悉く不眠不休に疲れて、その内の二名も遂に病歿したといふ涙ぐましい事實まである。實際かういふことは

日本人なればこそだ、唯に真似が出来ると、第三國の人々に見せてやりたい程であつた。

ここで私達も、先づ一日に一個の水筒の水で暮らさなければならなかつた。煙草もキャラメルも兵隊さん達から貰つて、夜は一本の蠟燭の下で詩を書いた、涙と共にいろ／＼の記録をノートし、深い感動と共に不自由を忍んだ。ある兵隊さんは今も一年も鶏卵を見たことがないと云つた。最高の參謀將校は、冷凍の魚を初めて食べたといつて感謝してゐた。ここでは青物が無い、勿論魚が無い、揚子江にも鄱陽湖にも、いろ／＼の川魚はゐるが、それを漁してゐる暇といふものがない。皆前線へ／＼と待機中なので、夜中に出て行く隊もある。又前線から下つてくる傷病兵もある。その兵隊さんでゴツタかへしてゐるのだ。どうしてわれ／＼も我儘が云はれよう。

みんな風邪はひく、腹痛を起す、顔色も青ざめ、日に焦けて来て、まるで東京にゐる時とは違つた人間になつた。唯か一人は毎日絶食して寝込んでゐた。それでも今日はみんな野戦病院へゆく、病馬を見舞ひに行くといふと、飛び起きて来た。用意して行つた手拭もハンケチも眞黒になり、氷砂糖も無くなつて、只、クレオソートやキニーネやアスピリンのやうな薬ばかり飲んでゐた。

それでも〇〇司令部へ行つて、われ／＼を迎へてくれる將校さん達と、日本を談じ、世界を論じ、趣味などを語る時は愉快であつた。特に〇〇部隊から十三夜のお月見に招かれ、兵隊さんの

野戦料理で、草に莖を敷いて、芋のおでんで薬罐で温めた酒を御馳走になり、陣中演藝まで見せて貰つた時は、うれしくつて、酔つて、部隊長の手を握りしめ、私はぼろ／＼泣いた。そしてあとでどうして私はこんな泣蟲になつたかと、慚愧の念に堪へなかつた。

隘口街の攻撃

九江から又湖口へ戻り、湖口の街を見て戦況を聞き、小艇で鄱陽湖を西へ、三時間あまりで星子へ着いた。

茲は廬山の麓で、まるで箱根のやうなところである。植物も内地と同じやうで、風景のよいこと、これが平和の時ならばどんなであらうと思つた。有名な李白の詩「日は香爐峰に照つて紫煙生ず」といふ文句そのまま、廬山連峰がづらなり、九天より銀河の落つるかと思ふといふ瀧が、今も昔のまま二千米も高い山腹にかかつてゐるのが見える。われ／＼はこの兵站宿舎で、兵隊さん達の歓待を受けながら、毛布一枚でふるへながら寝た。そして翌日トラックに乗つて、最前線の隘口街攻撃を観戦した。

右手に廬山があり、左手に東孤嶺西孤嶺といった小山を過ぎ、飯塚部隊長が戦死された地點を後にして、下に一本徳安街道が通つてゐる山の上に立つて、われ／＼は司令部の副官から今日の

攻撃の模様を訊いて、廬山の殘敵のチェッコ機銃に撃たれながら、二時間も頑張った。

晝は熱いので、手拭やハンケチを出すと、白いものは敵の眼につき易いからといふので叱られた。某社のキネマ班が、われ／＼の苦し相な山登りをカメラに収め、一呼吸したところへどかんと来た。一同バツと飛上りざまつんのめつた。私などは否といふほど尻餅をついて、草の上に腹這つてしまつた。幸ひその光景はカメラに収められなかつたからよいやうなもの、あまり見事なニューモラス光景だつたので、醜態をうつかりニュースに残すところであつた。

茲では矢張りわが砲兵陣地の働きをよく見せられた。正面にある黃龍山、その右方の唐集山などへ向つて野砲重砲がとんでゆく。その援護射撃の下に、バツト白煙が立つと、徳安街道へ添つて歩兵が突進する。そのバリ／＼といふ機銃の音は聞えるが流石に姿はよく見えなかつた。もしこれ以上一哩も出たらわれわれの生命は必ず無かつたのであらう。それ程苦戦の場所であつた。

疲れて私が躓まる草の中には、まだ生々しい血のついた敵兵の青い鐵兜がころがつてゐた。手にとつて見ると、勇敢にも真正面に撃ちぬかれてある彈痕が三ヶ所もあつた。更にそのあたりには彈藥莢や機銃の彈帶がたくさん散らばつてゐて、一週間前には敵の陣地であつたのだ。然し死骸はわが軍によつて、かなりよく取片附けてあつた。

われ／＼はここで、副官や他の兵隊さんから、敵兵も決して弱くはないといふことを聞いた。

弱くないどころか、一人と一人ならば實に強く、何しろ廣東軍の支那兵などは跣足で半ズボン、彈藥を肩に擲掛けにし、青い鐵兜に軽いチェッコ銃、食糧は干飯のやうな炒米の袋と、小さい油の瓶をぶら下げ、掌に油を滴らし、炒米に交ぜて、ペロ／＼やるだけで、水筒も持つてゐない。その跣足の足の裏が一寸も厚いから、眞夏の藪の中も平氣で駆け廻れる。只彼等に缺けてゐるのは精神だ。衆を頼んで攻撃してくる時は猛烈であるが、いざ崩れるとなると、我勝に退却する。わが軍はそれと反對で、突込んだら死ぬまで突込む。精神的訓練が一致してゐるのだ。そして最後の一人になるまでも退却しない。その頑張り方によつて、頑強な敵陣をデリ／＼と占據して行くのだ。特にこの方面はわれ／＼の故郷の關東方面の兵隊さんなので、凡てがなつかしく又心魂に應へることが多かつた。

われ／＼の立つてゐる高地の、更に上にある金輪峰の激戦など、實に熱涙なしには聞かれぬ話で、わが〇〇部隊は一人宛跣足で岩山を這ひ上り、いくら撃たれても撃たれても、敵彈の盡きるまで攻めて／＼、やつと血と肉で奪つたのだ。その攻撃に参加して生き残つた牧野少尉（元モダン日本記者）は、眼に涙をためて、その光景をくはしく話してくれた。何しろ守るに易く、攻めるに難しいところで、ある部隊長などは（この風景のよいのかかへつて癢に障ります。）とまで云はれた。

敵空をとぶ

そり歸りは九江まで陸路四十餘軒、一気にトラックで突走つた。

途上、多く激戦のあつた處を通るので、われ／＼の心には何か肅然たるものがあつた。それに先へ行つたトラックが、又廬山の殘敵に狙撃されたといふし、一同撃たれるのを覺悟してゐたが、幸ひ無事に九江まで塵埃まびれになつて歸りついた。

その翌日である。われ／＼も希望してゐたことではあるが、實に突然に〇〇機へ便乗を許され、敵地を爆撃にゆくことになつた。徳安方面の敵軍約二萬、本朝より西方へ退却を初むといふ情報なので、それつといふので出動を開始する。まご／＼してゐる私は最前列の右翼の一機に乗せられ、アツといふ間に離陸して、大揚子江をとび、廬山をこんどは左に見て、瑞昌の沼澤地はるか、西方へ／＼と飛ぶ。私は機長と操縦士の背中にかぢりついて、やつと決心を固めてゐるうちに、もう敵空へやつて來た。(あれが徳安です。)と指差されて見ると、昨日觀戦に行つた隘口街などは豆粒のやうに小さく、正面に聳えてゐた黃龍山など單なる禿山に見える。

更に機中から下をのぞくと、見える／＼、山、川、畑、それが縞目になつてくる／＼廻り、二里もあらうかといふ藪塚が見える、小さい部落が見える、やがて修水の流れが見えると、もう

鐵橋が破壊されてゐるのが解る。とすぐ永修の街だ。

司令機からの無電、爆弾投下、黒いものが横に風を截つて落ち、逆立ちになつたかと思ふと、下の街にバツと黒煙が上る。一つ二つ次いで七つまで數へた。エンジンとプロペラの音で耳はゴウ／＼いつてゐるが、幽かに爆音がつづく。そのうちにキラ／＼といふ反射が私の顔を熱くする。敵の山地の一角が白銀のやうに輝き、赤いスイ／＼といふ焰も見える。飛行服で私のうしろにゐて、盛んに機關銃を下を撃つてゐる伍長さんに、(あれは何です。)といふと、(敵高射砲の一齊射撃です、何糞ッ。)とばかり撃ちまくつてゐる。私は機中をころげ廻つて、この伍長さんにしがみつきやつと何發か撃たして貰つてゐるうちに、(爆撃完了)といふ無電、そして機はクルリと方向を變へ、南昌を遙かに見て、又もとの北方へとぶ。——その間が約十分ぐらゐであつたらう。ふと見る青空に、敵の高射弾がひよ／＼のぼつて來て、又白い煙を吐いて落ちてゆく。われ／＼の機翼からは百米も下方だ。

(萬歳!) 私はカラ／＼になつた咽喉から、やつとこれだけの聲を絞り出した。そして地上部隊の兵隊さん達の仇を、少しでも討たして貰つたやうに嬉しかつた。この〇〇機は十二機揃つて出たが、一機も敵弾を受けず、實に沈勇そのもののやうに、〇〇基地へ歸還した。この時間一時間二十分、私は附ぬけのやうになり、半分聳になつて、機上からころがり降りた。そして初めて機

長の〇〇中尉から永修の敵を完全に爆撃したこと、建物よりも敵の戦車、トラック、人馬に大破損を與へたことなどを聞いた。然し氣が轉倒してゐた私にも、確かに敵の自動車らしきもの、駆け廻る敵兵の影などが、かすかに見えた。これで私の一ヶ月以上の溜飲がグイト下つた。有難う、有難う、私は機長さんによたらにお禮を云つた。

それから更に偵察機の通信筒釣りとり、彈藥、食糧の投下、地上部隊の道案内など、さまざま陸の荒鷺の働きを見せて貰つたが、特に〇〇戦闘機の能力を見せて貰つて、すつかり氣が強くなつた。敵機も恐れてこの方面へはやつて來ない。ここには〇〇部隊といつて、一機隊で敵機百五十も撃墜させた勇士がゐるのである。

海の荒鷺は華々しく長距離をゆくが、陸の荒鷺には地上部隊との連絡苦心がある。それは地上二三尺まで舞ひ下つてくるこの神技には驚き、そして感謝して、吾々は晴々とした氣分になつて陸の荒鷺萬歳を唱へた。

薩 摩

この間用事があつて鹿兒島へゆき、北は霧島から西南は揖宿から山川港、開聞岳の下をまはつて枕崎から伊集院と凡そ七十里、二日がかかりで車をとばした故か、薩摩の自然といふものが、身に肌に染まる程親しく感じられた。尤も七八年前も一度鹿兒島から向ふの大隅へ渡つて、佐多の岬の伊座敷といふところまで行き、野生のゴムの樹や棉の木龍眼肉の實るれいしなどを見て來たが、こんどはその雄渾な地貌といつたものにすつかり魅入られて來た。

霧島の山の中の温泉に浸つて、すつ裸になつて、南方の錦江灣にうかぶ櫻島を見てゐると、天と地がほんのりと霞んで、青いやうな、初々しいやうな、それでゐて重い地貌の感情がどつしりとあらはれ、全く古代のままの感じがまつ毛に溶けるやうだつた。殊に火山そのままの韓國岳の崩黄のスコープから、こんどは霧島神社へゆく路の下から、車をとめて草に腹這ひ、ゆる／＼した大きな春の日の下に仰ぐ高千穂の峯、これが全く青い苔に蔽はれたやうに美しく、少し尖つた古代の楯のやうな山容といひ、紅い砂岩が崩れかかり、幽かに天の逆錐が見えるところ、もう全く私はうつとりしてしまつた。非常に古い、然し新しい、あら／＼しいやうで優雅な、しかも

それが風雨の磨きがかかつてゐる味はひはちよつと關東にはない。神武天皇以來御三代の聖蹟といつた觀念が若しな者であつても、この圓みのある強勁さ、高古的でしかも流麗なものを失つてゐないところ、赤い夕雲がうす／＼と懸つてゐるのを見たならば、何となく胸がいつばいになつて、肇國時代の人々の精神や感覺がのりうつつてくるやうに思ふであらう。歴史に暗い私達でも、なる程よくかかる環境を御撰みになつたものだ、感心せずにはゐられない。その敬虔な、往古の感情、文字にも盡されてゐない自然そのものの呼吸が何とも知れず神韻をふくんで人に迫るのだ。否、むしろ人をしてその幽遠さの中に投入せしめるやうに思はれる感じは、どうでも遠祖先さうぜんの里といふまぼろしを如實にあらはしてくるやうに思はれた。

その次の日、こんどは西南の突端に、海から蒼いピラミッドのやうにそり立つてゐる開聞岳の直下を歩くと、やつぱり私はほんとの古い日本の自然そのものの代表を見るやうな気がした。ここには房州や伊豆に見るわれ／＼に親しい自然よりも、更に大きく古く、しかも清奇であつて、曠古的な感じがぐつと迫つてくる。この海、この尖り山、そして半島の松と麥の丘々を見てゐると、海の幸、山の幸の傳説も又木花咲耶姫の話も全く單なる空想ではないやうに感じられる。バックは全く茫々として青い大海原で、そこへ海から千米突も高い開聞岳が兀々としてそそり立つてゐるのであるから、しかもその山頂にぼうとして霞たなびき青い草木が茂つて、はつきりと

現實の大氣にかび上つてゐるのであるから、いかな幻想家も少しく想像の枠を歪められずにはゐられない。つまりこつちが夢想するよりも大きい奇形であるし、むく／＼として清純な鬼氣さへふくんでゐるのだ。この自然描寫といふものが私には巧みに出來ないが、とにかく海から爆發して來て、何百年かそのままに、何千年かそのままに、やつと人類といふものがこの邊を歩き出したところといつても、決して不合理には感じられない環境である。

その麓に古い小さい村があつて、枚聞神社といふのがあり、その縁起には神々の御名があふれるやうに書いてあつたが、もし木花咲耶姫といふ麗人がお生れになつた所といふならば、必ずこの邊でなくてはならないといふ感じがした。あかるい、温い、ぼうとした大氣の中に花のやうに光るものがある。丘も畑も只あらはに荒れてゐるやうで、人工が少しも眼立たない。南方的な樹が固まつて生えてゐる。嵐のやうな家がある。蛇や蜂や、海鳥や鳶がとんでゐる。蝶々もぬよう、蛇もぬよう。しかし中世から近代風な櫻がない。雀もぬない。淺蜩、蛤といつたものよりも怒濤の中からブダヒや石ダヒが釣れてくるところだ。私はこんなあらはな、古い、しかも明るいところを見たことはない。特にここが本州の最西南端だと思ふ故もあるが、それからつづく枕崎から坊の津、野間嶽や笠沙の宮の傳説も決して架空な説ではない。現在でも私達に、その自然環境が無言のうちに、生々しく囁いてくれるやうだ。そして私達の眼も頭もいつか蒼茫としてどこ

か時間のない世界へ拉致されるやうな感じであつた。

薩摩といふところは歴史の記録が多い。しかしこんどはそれよりも更に遠い、大きい、傳説の背景として、肇國の神々のふる里として、その自然環境に感心して來た。この経験は私にとつて久しぶりの大きな收穫でもある。

南の島

いくつになつてもわれ／＼の感性の中には、童ごころといふかメルヘンのな憧憬といふものがあつて、一つの山を越えると、その又先の山も越えて見たくなるやうに、一つの島へ旅行して、その先の島影を見ると、又そこへ行つて見たくなるものである。

初め大島へゆくと、次は新島へ行きたくなり、新島へゆくと式根島へ渡りたくなり、式根へゆくと三宅へ渡りたくなる。さうして何年かの中に、一つの島から次の島へと渡つて、島の形や環境について、ふしぎな自然の創造を見聞するのである。

海岸に立つて、例へば伊豆半島から大島なり利島を見ると、島とは單に陸の斷續された山塊のやうに見える。そしてうすい煙霧がかかつたり、時に灯が見えたり、同じ世界でありながら、何か變つた環境のやうに思へる。然し少しく遠くなつて、陸つづきには見えない島へ船で近づくと、島とは海中の山塊のやうなものか、或は波濤の中に浮んでゐる山塊の船のやうにも見える。兜のやうな形の利島、箱のやうな新島、枕のやうな式根島、神津島には天上山が聳え、三宅は圓い山塊を見せてゐるし、八丈には青い美しい八丈富士が波濤の中からそそり立つてゐる。

更に八丈を出ると、夕方になつて三段の瀾形をした青ヶ島が見え、又一日経つと鳥島が見え、その翌日になると、海中の妙義山のやうな、小笠原列島が水平線から浮び上つてくる。この水平線から浮び上つて来て、だん／＼近づくと大きくなり、高くなり、どつしりとした雄姿をあらはしてくると、島といふものは懐しい母のやうな、自然の懐ナツメのやうなつかしさが湧き、その山陰の港がこひしくなるものである。

殊に父島から母島へゆくと、青い高い乳房山に白い雲がかかり、その先に姉島や妹島や姪島が仲よくならんでゐるので、孤島といふこりは家族的ななつかしさが湧く。それに島といふものはどこへ行つても山坂が多く、人家はその陰の凹みに隠れてゐるから、一寸見ただけでは無人島でさへ美しく見える。外部が大自然そのままの断崖であり山壁であり、波浪の中からそそり立つてゐて、時に濱あり、樹木が茂り、まるで人工で拵へたやうなところも見える。

もし本船から小舟で漕ぎつけて見ると、さてその荒磯なり山塊が、いかに物凄しい原始そのままであるかに驚く。先日私は小笠原島へ釣りに行つて、さういふ無人島のやうな、姉島や弟島へのぼり、釣つた魚を流木で焼いて食べ、持参の水筒の水で咽喉を濡らし、一日も二日も遊んで来たのであるが、島といふものはなつかしい釣場である。

然し萬一これが緯度も経度もわからぬ大洋の真中の、前人未踏の島であつて、ロビンソンのや

うに生活せねばならぬとしたら——と豫想すると、ふしぎな興味が湧いて来る。島は明るい。漁具さへ持つてゐれば、魚具はあり、どこかに水が湧いてさへゐれば、原始の生活が出来ないことはない、その點で高山の山頂よりも明るい、もし友人でもゐれば一ヶ月ぐらゐ孤島の生活も悪くはないと思つたほどである。

その故か、私には島への旅行といふことがいつも忘れられない。殊に眞夏の簡単な生活なら、島でやるに限るとおもふ。貝や海藻を研究し、魚を釣り植物や昆虫を見て歩いてゐたら、恐らく退屈はしまし。寝るに洞窟があり、水があり、草があるとしたら、なまじのキャンプよりもよいとおもふ。只生命に危険さへなければ、かうして日の出を迎へ、夕陽を送り、月夜に、星の夜に、大きい波濤の音楽をききつつ、嵐の夜は貝のやうに眠り、朝には魚のやうに躍り、結構おもしろい夏の休暇を過ごせるとおもふ。島はわれ／＼の原始の故郷のやうな氣がしてゐる……。

沖繩の風色

私が沖繩を好むのには、いろいろの理由があるが、その第一はどこかオパール色をしたやうなあの風色である。そしていつも鮮やかな、蘇鐵の花の匂ひのやうな、あかるい常夏の感じである。支那大陸では春は東方からといふやうな言葉があるが、日本では春は南からやつてくるやうな感じがする。實際沖繩でいふ南風は四五月にならなければ吹かないであらうが、東京にゐる南の空を眺めてみると沖繩はいつも常春の風が吹いてゐるやうに思へる。もう尾類馬が濟んだであらうし、梅こそ見られないが、いつも草の花は咲いてゐようし、ゆるやかな蛇皮線の音とともに、古雅な琉歌

椿の花やあん美らさ咲ちゆい

我身も椿のごと眞白咲かな

と、乙女達が唄つてゐるやうな氣がする。それほど私にとつての沖繩の島々は、琉球時代の夢を見せてくれるところである。

この頃は神戸から三日目に那覇の港へ着けるといふから、今年こそ是非もう一度行つて見たい

と思つてゐる。あの海の色、あの島の風、そして阿且葉の匂ひ、珊瑚礁の干瀬、ババイヤの樹、想思樹、榕樹、福樹の葉、遊胡蝶、赤梧桐、天人花、佛桑花、夢見るやうな茉莉花のかほり、そしてあの乙女の肌の色と黒髪、夏の夜の夢のやうな蛇皮線の音。雪はなし、霜はなし、いつも常緑の島々。今年は少し方面を變へて、名護や運天港や、沖之永良部島へでも行つて魚釣りをしてみたいと思ふ。全く沖繩へ行つて遊んでゐると、一ヶ月ぐらゐる夢のやうに經つてしまふ感じがする。嘉例よしの船へ乗つて、上り太陽拜んで、那覇の港へ着く心地は、何といつてもロマンチックな味がある。人は經濟、人情、風俗と觀光するのによし、植物や地誌を研究するのによからう。そして更に多くの琉球歌謡を聴いてかへるのによいことである。

この前私は大いに島の風物を詩に、謠にしよと思つて努力したが、自由詩以外の歌謡調のものには到底書けなかつた。否、書けなかつたといふよりも書くのを中止してしまふほど、沖繩には歌謡が澤山あつた。よく風光の一すゝい島などがあるとすぐ詩の島歌の島だといふやうな廣告を見受けるが、行つて見ると新作の民謡一つない島であつたりするが、沖繩ばかりは全く歌の島である。どうしてこんなに各間切(村)に歌謡がそのまま残つてゐるだらうと、誰しも驚くほどである。それだけに以前は人の心が和やかであつたのだ。そしてのんびりとしてゐて、もちろん孤島苦といつたものもあつたらうが、みんな音楽好きで、歌謡も踊りも好きだったので、あのやう

に發達して今日まで保存されたのだらうと思ふ。現在でも辻町の三杉樓あたりへ行けば、恐らく四五十種の唄が聴いて來られるだらうと思ふ。それが多く三十字の琉歌で、方言と古語につつまれてゐるから初めて行つた人にはなかく解らないところも愉快だ。

近頃は沖繩もすつかり内地化して、芭蕉布を着た女も少なくなつたであらうし、手の甲に刺青した老婆もなく、丁髷の老爺も見られなくなつたが、あの女達のいぼじり巻きといひ會話といひ、あの風物にとりかこまれてゐると、やつぱり私達は奥亞馬吐（大和人）といつた古い時代の感じがある。そして

渡海へさめても照る月やひとつ

彼女も眺めよら今日の空や

といつたノスタルヂヤを感じてくる。何しろ辻町や田舎へ行けば、まだチル、カメ、ウサ、ウト、マカデといつた名の乙女がゐるし、男の姓名も古い大名のやうなのが多い。そして特殊な沖縄料理があり、泡盛があり、蛇皮線があるから、島の人々は悉く音楽家だといつてもよいくらゐに歌曲に堪能である。そして特別な琉球劇を持つてゐるし、歌謡と戯曲が一致したやうな組踊といふものを演じて見せてくれる。私はその中で（銘刈子）だとか、（執念鐘入）（花賣の縁）などといふのが好きで、毎夜見物に行つたものであるが（瓦屋節の由来）といふ芝居には泣かされ、

（鴻門の會）といふ史劇にはすつかり笑はされた。更に短かい踊では（花風ぶし）だとか（鳩間ぶし）だとかいろ／＼見たが、沖繩本島の先の宮古島、八重山島のもので、那覇にゐればよく見られる。

それに沖繩の月は先づ日本一といつてもよいと思ふ。そして月を見るには首里の古都がよい。何しろ月の光で七號活字が讀めるのだから、この亞熱帯近くでもマニラあたりの氣候は惚ばれる。私は月の光で花の色を識別出来るのに驚いた。それから野生の白鳥だの、あやはべるといつた與邦國蝶も見だし、糸満の町では海の中へカラ／＼と馬車を挽き入れるのも奇異な感じがして見物した。それに糸満の物賣女の勇敢さ、市場の賑やかさ、辻町の娼館風俗等々、私は誰にでも是非一度は沖繩へ行つて見るとすすめるのだ。そして特に首里の古都の月を見て來いと云ひ添へる。とにかく布哇と同じで何十年か前までは小さくとも王國であつた。宮殿もある、城もある、島特有の文化がある。習俗がある、今では沖繩といつても琉球といつた感じが、私達旅人には又となく懐しいものである。いざ歸るとなると尾類（娼婦）でさへ

三重城にのぼて手拭むちやぎれば
はや船のなれやちゆめど見ゆる

と唄つて涙ぐむほど人情の厚いところである。従つて私達もよく人々が唄ふ昔の航海の唄、上り

口説くはなといふのを一つぐらゐ記憶して来て、汽船の甲板で朗らかに唄ふやうになるのである。

春がくると、もう沖繩は春過ぎたらうと思ひ、若い夏の匂ひさへ想像される。そして風俗的なもの、古い文化的な研究といったものも面白いが私には何よりもあの幻想的な空気がうれしい。沖繩へ行つてゐるうちだけはどことなく、百年以前の生活といつたやうな気分まで味はへる。そしてあの民家の單純な建物、板戸、石屏、珊瑚石の塀、常緑の樹木、更に萬葉時代の調べがあるやうな方言、あの中で暮らせたらと思ふが、仕事の都合で永い滯留が出来ないのが残念である。

それにもしこんど行つたら、大いに釣りをして南海の魚を研究して見たいと思ふ。あの小さい列舟さしなふねといふのに乗つて、那覇の港から慶良間群島糸満から名護、その他の小さい島々を釣つて歩けたらどんなだらうかと、いつも仕度をしてゐるのだが、好機に恵まれないのが遺憾である。それにもうそろ／＼春がやつてくる。東京にゐると伊豆大島や房州へ行くばかりであるが、一と思ひに南紀か瀬戸内か、ずつと出て沖繩へ——と思ふと胸が躍る。何しろ南海の島々だ、日本の真珠だ。沖繩は私にとつての夢の島々である。

釣の探究

古くは老人か閑人のすることであつた釣りといふものが、この十年ばかりの間に頓に盛んになつて来て、都下一流の新聞が釣りの報道欄を作ると、一舉にして十萬の増刷を見るやうになつたといふし、釣魚研究の雑誌が毎月二三種は賣切れになるし、東京市中の釣人は約五十萬以上あるだらうといふ豫想である。更にこの事變下では、釣りといふものが健全な國民娛樂として、亦好個の野外スポーツとしても、厚生省邊りから推奨されるやうになつて來た。

それは元來釣りといふものが、一面非常に原始的な素朴な遊技であるし、又一方には自然科学的な興味をそそるゲームのやうなものであるから、一二次やつて見るともうその魅力が忘れられなくなる。更にわが國は四面海である環境上、どんな人でも少年時代には一二次やつたことがあるであらう。特に農村では小川や沼に恵まれ、山では溪流が涼々と流れてゐるし、東京を中心として見るならば、四季ともに各種の魚が釣れる。その點でイギリスの鱒釣りやアメリカの鮪釣り以上、わが國では大略四百種以上の魚が釣れ、その釣法も亦千差萬別で、その興趣たるや世界に冠絶してゐるといつても過言ではない。

然しこの頃はあまりに盛んになつて来て、日曜の水郷行列車などは釣人で超満員である。更に六月の鮎でも始まるとなるとスキューヤーもハイカーをも凌ぐほど釣人が押出す。そこで先日東京市の観光課が、私達と共に「釣人訓」を作つて、釣道徳を高潮することになつた。それは先づ農村の畑を荒さないこと、濫獲を慎み、魚と釣場を愛し、釣本来の趣味を正しく生かしつつ、釣道の向上を計らうといふことである。東京近郊で釣れる魚は確かに少なくなつた。それは農村が市街になり、海も亦船舶の運行が激しくなり、河も海も水や潮が悪くなつた結果もあるが、一つには無智な濫獲が原因してゐる。その対策として、季節はづれの魚や、あまりの稚魚は獲らないこと、農村や山村では稚魚を大いに放流し、自給自足の食料ともすること、それは現今農林省あたりでも大いに努力し奨励してゐること、よりよく魚を育て、より愉しく正しく釣るといふことになつて来たことは、私達釣人にとつて何よりの好傾向である。

一週間の六日働いて一日釣る、野外をあるく、自然に親しむといふことは、ハイカー以上に愉快な興味のあることで、都會の濁つた空気からのがれ、又肺臓に新しい風を入れ、太陽の紫外線を大いに攝取することになるから自然に人の精神も洗滌され、気分も澄明として来て、新しい活動力をつくることになる。殊に野外のフナやタナゴは足で釣れといふだけあつて、一日四五哩は水邊をあるき廻る。溪流のヤマメでも鮎でも谿谷を溯つて釣るし、時にロック・クライミングも

やらなければならない。更に磯釣りとなると、怒濤の花ちる岩礁をカンガールのやうに飛びあるく。かうなると何歳になつても少年のやうな愉しさだ。殆ど無念無想で遊ぶ、魚と格闘するといつた氣持で、明鏡止水、じつと野川の水を見つめてゐる時などは、自ら大自然の中へ溶入つてゐる心境である。

ある人は「釣禪一如」といふ。釣の心境は禪に等しいといふのだ。一般によく僕は氣が短いから釣りなどは出来ない——といふ。大間違ひだ。氣の永い人には釣りは出来ない、出来ても愉快なスルリのある釣りは出来ない。私の知つてゐる範囲でも釣りの上手な人ほど氣が短い。そして暇のない多忙裡にゐる人が多い。醫師、辯護士、重役、音楽家、その他都會でせつせと働いてゐる人達で、この人達が悠然と竿をならべ、水を見つめてゐるところは、別人のやうにのんびりして見えるが、その心境は相應に忙しい。何故といつて、今魚が来るか、餌はどうか、今日の潮、水温はどうか、風はどうか、この場所の環境はどうなつてゐるか、絶えず自然への観察と注意を怠らないからである。そこで釣りは一般人よりもインテリの方が早く上達する。といふのは探究心が強いささかでも自然科学的に行動するからである。

私はこの氣持を「釣詩一體」といふ。さう釣りに行くと、その土地、その川、その海、その雲、風、光、潮、時間、魚などといふものが一つになつて、私のために大きい自然詩をつくつて

くれるやうに思へるからだ。そこには音楽もある、繪畫もある。生きた自然がその本來の運行によつて釣りといふ詩を書かしてくれる。一分一秒先が未知で、晴れ曇り、又魚が躍る。従つて結果は殆ど自然に任せてあるのである。釣れなければどうして釣れなかつたか、水温が低く、又風が強く、或は魚が季節的に移動してしまつたといふことが解るから、誰を恨むべくもなく、大いに釣れることは好ましいが、又釣れなくとも釣りに出掛けるといふ心境になる。

多獲ばかりにあせる人、竿や道具や仕掛けばかりに凝る人、場所や釣法を祕密にしたがる人、釣場を荒し意地悪をする人、船頭などを金で馴らす人、さういふ人は正しい釣人ではない。而も亦さういふ人はある時期だけでやめてしまふが、本當に釣りを愛し、釣りを愉しむ人は恐らく一生釣つてゐる。江戸時代の言葉に「釣りは最後の道楽」といふことが謂はれてゐるが、全く釣りは孤獨でも樂しめるし、人を傷けることなく、風流に、天然の道義に即してやつてゐることであるから、恐らく他のゲーム遊びを凌ぎ、もうこれ以上遊ぶことがないといふまでに行つた人の心境に、最も相應しく出来てゐるのである。

特にこれからの若い釣徒は、古くからの習慣通り漠然として釣つてゐては効果が上らない。それには幾分の科學性といふものに立脚して始めなければならぬ。溪流ならば先づ降雪期からの山の状況、雪は多かつたか、秋からの氣候はどうであつたか、春の雪解からどう水が變化してゐ

るか、それによつて去年からの溪流魚の發育が解り、又鮎の湖上の様子も調べられる。水郷ではやはり氣候と水量、鮎の産卵期の状態、夏の早魃、秋の颱風、冬の雪と氷の模様等をよく調査してから、その釣場である川なり沼を観察すると、釣れる釣れないに拘らず、何故釣れたか、どうして釣れないかが解つてよく魚の状態に堪能することが出来る。

さらに海となると大きく深く、自然科学者も魚學者もまだなか／＼明かな觀察を發表し得ない。大略東京灣の海流は反時計廻りであるが、魚は正しく時計の針のやうに左から右へ廻る。潮が房州の洲の崎の鼻から、館山、大貫、木更津、千葉と廻つてゐるのに、魚は三崎の方から浦賀、横濱、東京といふ風に乗込んでくる。その上毎日の満潮干潮といふものが月の引力に支配されて、大潮、中潮、小潮、長潮と一日だつて同じ状態でない。その上に又その日の風の方向が違ふから、海流、潮流、風速と三つのもものが廻轉し、相應の波浪をつくつてゐる上に、又氣候、気温、水温の變化といふものがあるから、魚の状態も毎日毎時變るし、今朝釣れても夕方には釣れないこともあらうし、夕方釣れても明日は釣れないこともある。

何しろ海釣といふものは、五十尋百尋の碧海の上を小さい舟で漕ぎ廻し、ただ一本の透明なテグスの綸糸で引いてゐるのであるから、馬鹿くさいものもなきすぎるとも見えるが、然し只一本のテグスを入れて、海底の魚を狙つてゐるだけあつて、それ相應の觀察と豫想と冒險のスキルが行

はれてゐるのである。十尋以上のところになつたら、只漫然と砂泥の上に鉤を流してゐるのではない。海には俗に「根」といふ魚のつく岩礁があつて、船頭は海上から「山をたてる」と稱して、陸地からの三角點をつくつて、このあたりだといふことをよく知つてゐる。この根をはづれたら魚はつれない。これからの鯛、スズキ、メバル、カワハギ、アイナメなどといふ魚は、沖から乗込んでこの根に生棲し、植物性や動物性のプランクトンをたべてゐる。従つてよく潮の通ず、プランクトンの多い場所へ集る譯で、船頭もここなら鯛がつれる、スズキが釣れるといふことを、永年の習慣でよく知つてゐる。そこを船で漕ぎながら流して釣る。根をはづれると又漕ぎ戻すといつて調子で、熱海沖初島まはりには、この好根が澤山あるから、あの附近の釣りは周年出来る。又所謂「中釣り」と稱して、中層に群れてくる魚、つまり鱒、鯖、イサギなどを釣るには、先づ季節と潮を見て冒險的に綸糸を下す、そして釣れば夜も釣る。特に鱒や烏賊は夜釣りをする。

五月の八十八夜をすぎると、麥が花をつけ、芥子が咲き、川で鮎、谿谷でヤマメ、海では青ギス、白ギスが釣れ初める。伊豆の狩野川あたりでは、五月十五日には鮎の解禁をやるさうであるが、鮎には「ドブ釣り」と「友釣り」の二種があり、ドブ釣りは毛鉤で釣るので、いかにも文化的で自然と人智の交叉をなしてゐる。この鮎の毛鉤は一つ／＼名がついてゐて、凡そ千種もある

が、よく釣れる鉤は先づ二十種ぐらゐなものである。初夏にはやや赤系統のもの、眞夏には黒く青いもの、秋には茶系統のものを用ひ、更にその川の水色に従つて朝と晝と夕方によつて、いろ／＼毛鉤を換へて用ふところが、その人の観察と技巧である。私は先年の初夏には紀州の紀の川へゆき、七月には岐阜の斐楫川へゆき、かなり發育のよい鮎を釣つた。

然し鮎釣が本當に面白いのは、「友釣り」の方で、鮎が鮎を追ふ闘争性を利用して、罟の鮎に鉤をつけ、追つてくる鮎をかけるのである。これは山へゆく専門の漁師があり、素人では先づドブ釣りを二三年やつてからでないとうまくゆかない。ドブ釣りでは溪流の深み、淀み、瀬と狙つて、三間以上の竿を上下させてゐるのであるが、友釣りとなると勢ひ荒瀬へ立込まなければならぬ。腰まで激流に浸して、三間以上の竿を振り綸糸の先へ生きた罟の鮎を縛つて泳がし、尾鰭のところを掛鉤を流して、次の鮎を釣るのであるから、かなり元氣と健康がなくては出来ない。その代りドブ釣りの鮎はせい／＼四五寸までであるが、友釣りとなると七八寸の大物が容易に釣れるので、鮎釣り黨は六月の解禁がくると、多摩川、相模川、伊豆の狩野川、奥津川、富士川、茨城の久慈川などへ遠征するやうになる。

海ではこの季節に、江戸前の脚立釣りと稱して船橋沖へ未明にでて、海中へ脚立を立て、その上から青ギスを釣る。白ギスは乗合船が出て、横濱から川崎沖を釣る。この頃の山の鮎、海のキ

スは一年中の最もよい環境で、山では村から溪谷をハイキングし、植物や地質や水質、流の状況を観察し、毛鉤の選擇やら實技の研究をするし、海では海天一色の青い波の上で、風さへなければ一日ゆつたりと、あの青銀にかがやく上品なキスを釣り、その釣れ味を満喫することが出来る。然し人の貸してくれた竿や仕掛けで、初めの一二回はやつても、三回目となると凡て自分で鉤から鉤素、錘、綸絲、竿と選擇し、工夫しなければ面白くない。溪流でも魚のゐさうなところをいち早く觀察し、試釣りした人がよく釣るやうに、海でもどこの海底がどうなつてゐるか、魚はどういふ方向をとつて、どの邊の海泥を好んで群遊してゐるかといふことを知り、十米の深さならこの仕掛け、それ以上ならかういふ風にといふ支度を臨機應變にして置かなければならぬ。

釣りのコツとか技術とかはその人の自然科学的な工夫一つである。そして潮や水溫や魚の動きに従つて、いろ／＼觀察し、自分で作つた仕掛けで釣るといふのが面白いのである。

仕掛けのことは釣具店で訊け、溪流のことは村人に尋ねよ、海のことは船頭に頼め——さて、その後は自分の技術と考へ一つで、水中の獲物を釣りあげるのだ。そこに小さいながら科學する心がある。これを古い老人などにまかせて置かないで、若い頭の良い人達が進んでやつたならば、興味百パーセントで、將來の釣りを開拓するのは、やつぱり頭の良い若人を俟たなければならぬ。

らない。例へば紀州の船頭が考へて、鯛の擬餌鉤を作つた。それは赤いゴム風船を切つて鉤に縛るだけの工夫で、これを房州勝浦へ持つて來て使用したところが成功した。テグスの代りにアメリカではナイロンの絲で成功した——といふやうな、發明や發見が澤山あつて、釣界は日に日に進んでゆく。その點で釣りは舊人よりも新人に期待することが多い。東京灣の底の魚の狀況はまだよく解つてゐない。所謂隠れたる根がまだ澤山ある筈である。それを發見し、大いに釣つて貰ひたい——といったことが山ほどあつて、釣の探究こそいよ／＼興味のあるスポーツと「科學する心」の發展を持つてゐる。

郷土民謡をたづねて

秋風の吹き初める二百十日に「風の盆」又は「おわら祭」といつて、越中八尾の町には、古いおわらぶしの踊りがある。

今年はその九月一日が奉公日なので、二日三日と行はれ、時局柄でも銃後の明るい娯樂として行はれるといふので、私は九月一日の夜行で上野を發ち、二日の朝八尾についた。

尤も四五年前に一度八尾へ行つて、城ヶ山公園で踊るのを見せて貰つたが、その時は桐の花吹く五月だつたので、單にその優婉な手振りと、哀調のある唄を聴いたのみであつた。然しこんどは、早くも秋が訪れた古い町々を背景に、ほんのり燈つた雪洞ゆきどう、家々の幕も古風であり、又竹のすだれもなつかしく、更に踊子や唄ひ手が、町を夜更けまで流してあるく古雅な風俗をたづねると見せて貰つて來た。

このおわらぶしは、麥屋ぶしなどと共に平家時代からのものと謂はれ、いかにも悠長な、それでゐて北陸風の哀愁のある節で、一時廢れたのを、町の「おわらぶし保存會」といふのがあつて、これを復活させ、三十年ほど前から三つの振りをつけて、全町で擧つて踊るやうになつた。

然し他の盆踊などと違つて、この唄は全く土地の者でなくては唄へない旋律をもつてゐる。若い内は踊り、中年から五十以上にならなければ、ほんとうに唄ひこなせない。それに踊りも凡て八尾で生れた人達のみで、男女の別が正しく、又どこか優美なものがあるので、一般の彌次馬などには手も出ない。

そこで二日と三日の晩、折から十二日と十三日の月のある聞名寺の大きな境内で、本堂を背景に、各町から踊子が出て踊り、老人達は深い自然の野山の聲をしぼつて唄つた。その聲の若々しさ、清々しさ、あげたり、迴したり、落したりする節の悲しいやうな優婉さ、全く古い日本人の唄であることをしみじみと感じさせた。一緒に見物してゐた富山の知事さん、市長さんも、美しいものだ。大いに唄ひ踊り、明日の活動の慰安にして下さいと演説した。

本堂の競演がすむと、各町の唄ひ手、三味線、胡弓、踊り子の群れは、靜かに町を流し初めた。靜かで長い唄聲、淋しいやうな三味線のせせり、胡弓のむせび泣き、露のふるやうな靜かな山の坂町を、そろり／＼とやつてくる。六十の老婆、七十の老爺が、昔を夢見るやうに、今も若々しい聲を出して唄ふ。保存會のK博士の門の松の枝にはJOCKの録音のマイクがぶら下り、その下では祭の夜もコホロギがないてゐた。

私は二日二夜、たつぷりとおわらに満足し神通川の鮎をたべて、K博士のお宅に厄介になつ

た。尤も私は保存會で年々募集するおわらの歌詞の選者でもあるので、一度は本物の「風の盆」も味はつて置かなくてはならないからであつた。

四日には八尾を辭し、高山線で、高山を経て下呂温泉の水明館に泊り、五日には美濃太田で乗換へて、一度は訪ねたいと思つてゐた郡上八幡へつた。

この町のすばらしさ、私の夢見てゐた山の町をつくりで、更に夜は十五日の満月であつたからたまらない。早速、土地の郡上踊の唄を聞かして貰ひたいと思つたが、一人も知人がないので、やむを得ず、なるべく年をとつた藝者をよんで貰つて聽いた。

この郡上踊は八尾ほどむづかしくなく誰にでも出来て、すぐ踊れるやうになつてゐる。それに八尾のはより古くから古雅なものを失はないやうにつとめ、踊子も揃ひの衣裳やはつびを着て組々で踊るが、ここのは大衆的に輪になつて踊る。城主の殿様が、庶民和樂のためと奨めただけあつて、ただの浴衣で踊れるのだ。唄も節も少し稽古すれば一ト晩で覚えられる。

只感心なことは、一つ歌詞を八つも曲を變へて唄つたり踊つたりすることだ。岐阜の豆千代の唄ふのは「新郡上ぶし」だと土地では云つてゐるが、曲は、川崎、三百、ヤツチク、松坂、サバ、郡上甚句、サワギ、猫の子と八つある。その中の松坂、甚句、猫の子などは、土地の人でなくしては唄へないと、藝者達は謙遜してゐたが、三百とか、ヤツチクとか、サバなどといふ節は、

實に庶民的で面白かつた。

特に「サバ」といふのは、昔岐阜から焼鯖を賣りに來たその聲を唄にしたものだといふので、歌詞も又鄙びたものであつた。更に他の歌詞も昔のままで、今も城山には殿様が居り、七人の家老がゐて御維新の騒ぎも知らぬ山の町といふ気分がある。四面山で、吉田川といふ長良川の上流がながれ、その斷崖の上に静かな郡上八幡の町はあつた。

その上にはつ秋の満月はながれ、谿の水音の上に古い老舗の店はひらかれ、丁髷に結つた老翁が「郡上八幡出てゆく時は、雨も降らぬに袖しぼる、ソンデセ」と、そのまゝ子守唄にして唄つてゐた。

ここで私は鮎の釣つりを買ひ、又二日相生といふ絶景の村で谿で、七八寸の鮎を釣り、山の地酒に馴染んで、名残を惜しんで名古屋まで出て來た。

いよ／＼秋、更に冬、郡上八幡はどんなであらう。もう一度訪ねたいものである。

(昭和一六年九月)

明日の詩歌

この頃は街へ出ても、封建的なロマンチックなもの、怪奇なもの、複雑なるものが、いつの間にか遁走したやうに無くなつて来た。書肆へはいつてもただ事變と現状を明示したやうなもの、或は古典の復活が眼につくし、花やかな智慧と情熱のアラベスクのやうなものが影を没し、おのづから胸あふれるやうな夢幻味が乏しくなつて、たゞ淡彩的な毒にも薬にもならない小説などが氾濫してゐるばかりである。そして紙がないといふのに出版社がいつの間にか増加してくるし、米がないといふのに壽司屋が又ふえてくる一方ださうである。

銀座を歩いてもう以前のやうに買ひたいとおもふものがなくなつた。日用品でも何でも普通に通に間に合つて居ればよいし、靴でも服でも代用品になつてしまつたから、よいものが欲しいの何のといふ選擇心がなく、所有慾も減じて、自分の趣味嗜好もあきらめてゐるから、料亭へ行つても、食堂でも、食料品店でも、みんな簡素に、あるものだけですませて置くといふ風になつて来た。

ウキスキー、舶來煙草、貴金屬類、凝つた料理、そんなものはもう凡て過去のゆめである。わ

れ／＼は有るものだけを身につけて、與へられるものだけを讀み、啖べ、味はつて、戦國の國民として生きてゐるのみである。嘗つて過去にかういふ時代があつたらうか、誰やらが昭和の維新だといふのも宜くなるかなである。われ／＼は戦つてゐるのである。來るべき世界に向つて新しい日本として生くべく戦つてゐるのである。古い文明をすてて、新しい文化を樹てようといふのである。強い惟神かんたかの國民として亞細亞を興さうといふのである。

物が大切だといふことがよく解つて来た。間に合はせものより本物がよいといふことも、スフよりも純綿純毛、合金よりも鐵が大事だといふこと、生一本なもの、一時的な現象よりも永遠的なもの、夢よりも現實、不調和より整理、複雑よりも單純、即ち純潔なるもの、天真なるものが希求され、物によつて精神圏迄同一の方向をとつて進むやうになつて来た。その反省と類似性によつて、われ／＼は古例の生活を懷ふやうになつた。祖先の純朴、豪毅、雄渾なる生存心理を會得しようとして、更に日本的なるものの文學をも再検討する迄になつて来たのである。

この懐古、この精神の郷土への復歸は、われ／＼の日常生活にまで及んで、われ／＼は何よりも先づ民族として、國民として生きるべき自覺にうながされ、あるがままの姿、あるがままの心をもつて、極く自然に、明るく、強く生きようと思ふやうになつた。われ／＼は且つてのロシア文學を棄て、フランス的趣味を棄て、萬葉、古今の精神から、獨逸の合理主義と併行しようとする

へ企てるに至つた。皇室、神、太陽は炳乎として輝いてゐる。われ／＼はその日の米、そして簡素な家馴れた衣服、そして持つてゐるだけの物によつて、日本人としての精神肉體を生かせばよいといふまでになつた。空は青い、日は明るい、この郷土としての大地に立つて、初めてわれわれは何を思ひ、何を爲すべきかを知るやうになつた。古代の神は復活した。古代の生活は生きて来た、そして未來はわれ／＼の一步に迫つてゐる。正直に云つてまだわれ／＼は眞の文化を持つてゐない。やつとあらゆる不純なものを剝脱して、光明裸身のまま、いかにして生ぐべきかに到達したのである。

もうわれ／＼はあの花やかなフランス文學が持つてゐる感覺には魅惑されない。太い強い極地のやうなものから出たロシア文學の人情にも犯されない。キットのあつたピフテキのやうなアメリカ文化にも眩惑される事もない。われ／＼は歐羅巴の古い文化を持つ國々が、煉瓦のやうに毀れてゆくのをニュースで見ると。新しく民族が興つて、古代ローマの變遷より以上のスピードをもつて、地球を靡捲してゆくのを見る時代に達し、われ／＼の持つてゐる武器、われ／＼の持つてゐる文化、そしてこの在るがままの精神と肉體をもつて、いかに行進すべきか、否、進まざるを得ない状態にゐるのである。もう老子の無爲は赦されない、佛陀の諦めも孔子の仁も役には立たない。今日では文學も亦政治と共に民族の指導的地位にあらねばならぬからである。

ある人々は國語の問題を提げて立ち上つた。もつと實際的な簡單で、言靈の幸ほふ國の傳統を生かせといふ、ある人々は國策そのものを直ぐに文學せよといふ、ある人は萬葉精神にかへれといふ、更に郷土を生かせ、大陸を拓け、南方を見よ——と各自その分野から叫ぶ。それもよい、然し文學は科學や工業のやうにすぐ動くべきものであるか、特に詩歌はそのやうな便乗性を持つてはゐるが、そんな正面的な時代の思潮をもつて指針とはしてゐないのである。

詩歌はゆつくりと深く大きく、民族の心をもつて起ち上るべきものである。古代の神々のやうに、もつとゆとりをもつて高らかにみやびやかに、ほんとうに生きてから、生くる心を誌すべきものである。日本よ、もつと貧困せよ、缺乏せよ、苦しめ、戦へ、そして世界をより検討し、より認識し批評し孤島の生活を生活し、独自の科學を科學し、新しい神話と共に出發せねばならぬ。まだ／＼われ／＼の中には不純なものがある、巴里の匂ひ、紐育の色、支那の響、その他雑多な生存感覺があつて、いかに正面物を失ふともまだ形影を残してゐる。これを戦ひ、これを消化してから新しい世界をつくる場所に、ほんとうの日本の詩歌が生れる。われ／＼は二人の家庭を必要としない。和泉式部も西行も、芭蕉も秋成も一人をつたのでよいではないか。昭和には昭和の智能と感情と光を持つた詩人がなければならぬのである。

それにはつねに新しい精神、朝の感覺、純潔への希求、天真への回歸が必要である。光、雲、

水、空、そして花、動物、愛情、若さ、涙といふものが、いつも幼年の世界、青春の精神にあふれてゐるかを再認識せよ。われ／＼はさなきだに文學に毒された、政治に苦しめられた、チャーナリズムに支配されすぎた。そんなものを一切放擲して、野生の一嬰兒としての黒い瞳、古代青年のやうな力、乙女のやうな白齒で幾度も／＼この世界を知覚せよ。そこから神話が生れる、民族のお伽噺が盛りあがる。實際にいつて藝術には日本的とか、國策的といふものはなく、眞に純粹なる詩歌ならば、それは國民の肺部に、民族の血の中に流れてゆくべきものでなくてはならないのである。

われ／＼は今日の困苦に感謝しよう。日本が日本たるべき曠世の出發にあたり、米がなければ草を食へ。酒がなければ木の根を絞れ。そしてこの十年を二十年を來るべき次代の詩歌人のために、新しいチャヤルを明示して置かねばならぬ。われ／＼はまだ支那の民衆ほど塗炭の苦しみに落してゐない。ネグロのやうに卑屈にされ、ユダヤ人のやうに白眼視されてはゐない。われ／＼はのびやかな子供の世界、潑刺として娘達の世界を持つてゐる。更に夢見る青垣山も青海原をももつてゐる。太平洋はまだ／＼詩歌されてゐない、東亞全體が歌はれてはゐない。フィリッピンもある、タイもある、イランもある。われ／＼は日本文の詩歌が雲南から西藏へ、更に南阿に渡つてダエノス・アイレスも、リオ・デ・ヂャネロでも、その音樂と共に新しい祭日の花を着ける

日を希望してゐるのである。

古い帽子を冠つて、古服古下駄で、漂々乎として陽春の銀座をさまよひながら、私はそんなことを考へ、おもひつつ、少年を見、少女を見ては、日本はこれからである、詩歌もこれからであると、八百萬神のみ裔の一人として朝焼けのやうに笑ふのである。

従軍抄

従軍してゐるとふしぎなもので、誰しも非戦闘員でありながら、つい戦闘員のやうな気分になつてしまつて、上海あたりになつてさへ、何かかう昔の西空を睨むで、肚の中では畜生といった拳固をかためてゐるものである。従つて戦況ニュースなどをいち早く聞くと、實に生々しく肚に應へて、つい涙ぐんだり齒齧みをしたりする。ましてわれ／＼は新聞記者ではなし、さうすぐ報道に關はらなくてもよいのであるが、何かかう華々しい實戦にでも參加して見たいといふ功名心に驅られるらしい。

それを凝と吐へ押へつけて、さて、蘇州、杭州、南京、安慶、九江と溯つてゆき、皇軍の涙ぐましい戦跡をたくさん見せつけられ、すぐその後にくる建設状態を見ると、どうもじつとしてゐられない。こんどの従軍でも、この肚に深く押へて、あらゆるものを見てくるやうにと誰もがいふのであるが、とてもそんな辛いことは出来ない。この戦ひをどう見るか、この現實をいかに批判するか、インターナショナルな關係をいかにするか、ヒューマニターからは如何——といったものは、先づ背中に背負つてしまつて、ひたすら戦ひの感情を追つてすすむ、そこには實際涙ぐ

ましい兵隊さんがあり、中支の大自然が眼の前に廣がつてゐるのだ。

われ／＼は只もう自分の感覺を武器にするより方法がない。何日の戦ひはかうであつた、何處の戦ひはかうであつたと聞き、手に汗を握り、肚に涙をためて、傷病兵のお見舞ひに行つたり、軍馬を見に行つたりする。誰もがまだ敵を見ない。敵といふものは遂にわれ／＼の肉眼には現れないもので、前線ですらガッチリ兵隊さんが起つて、眞剣に敵に當つてゐるから、われ／＼はその砲聲をきき、地にひれ伏して、此奴だなアと合點するだけである。途上長江の汽船で狙撃された時も、私は實際うろ／＼してしまつた。私には倚るべき場所がないのだ。いくらペンを握りしめたつて、客觀的立場になつて、凡てを見ようとしても、私の肉體はふるへてゐるのである。この時もしそれつと號令がかかつて、何かで突進するやうなことが出来たら、誰しも夢中になつて敵を目指したであらう。然しわれ／＼は只この經驗を緯として、戦ひといふものと、兵隊さんの心理を臆測して、如實にそれを認識するといふより方法がない。

この間接的な感情といふものは、かなり苦しいものである。それを堪へてわれ／＼は思ひ忍び、理念を背中に背負つて、感情の眼を大きく開いて、前線へ／＼とすすむと、實際は戦ひの出来る兵隊さんがうらやましくなつてくる。その癡癡病の上なしの男ではあるが、さういふ氣にならざるを得なくなるのである。そして特務機關へゆき、兵站部にゆき、司令部へゆき、飛行隊

へゆき、その他電信、馬糧、運輸などを見學し、その間に新聞班やカメラ班が苦勞して飛馳つてゐるのを見ると、反つて邪魔になつてはいけない、迷惑をかけてはいけないといふ氣になり、又後ずさりをしてしまふ。それには誰しもがだん／＼堪へられなくなつて來た。

すると、いよ／＼どか／＼とやつて來た。この恐怖は一種の歡喜に似た恐るべき實現であつて、この敵陣により、われ／＼は自らの感情装置を洗濯することが出來た。撃たれるぞ、注意してゆけ、それトラタタの全速力を出せ——といふことになつて、事實死を考へ、前觸れの無い敵陣の下を通るとなると、もちろん身體がふるふる、咽喉が乾く、然しわれ／＼は戦闘員ではないから、腫病ではあるが、只卑怯ではないぞ、やるならやつて見ろ、當つたものが死ぬだけといふ氣になる。殊に砲彈といふ奴はムラ氣で、當らぬところへ當り、當るべき射程に當らないこともあるから、天佑といふことも考へざるを得ない。實際、こんどの從軍ペン部隊では、一人ぐらゐやられるぞと、心配された將校もあつた位であつた。

そこでわれ／＼は、事實戦死の心理はかういふものかといふ尊い經驗をした。そしてこんどは勢ひこんで、爆撃飛行の〇〇機に乗せて貰ひ、生きた敵空をとんで、どん／＼とやつて來たが、この時は全く青くなつて觀念してゐた。そして基地へ歸還してから、われ／＼のやつたことを初めて認識した。私の熱い冷い血の汗の幾滴かは、確かに敵陣へ上から滴つたのである。この感情

は私をやつと一人前の從軍者にしてくれた。もう私は強ひて兵隊さんの勞苦に對しても氣兼ねしなくともよい、この感情を知つただけで、どこかそこに私の就くべき部署が出來たやうに思つた。私の憂鬱は解けた。敵陣はやつと私をこの戦の中の極く小さい一部分としても扱つてくれたのだ。

兵隊さんはわれ／＼の兄弟である。實際内地で逢ふ兵隊さんと、戦線の兵隊さんは違つた感じがする。われ／＼はこんなにも親しい、こんなにも生々とした兵隊さんと、一つ目的に進む。ここには一切内地のやうな生活競争も階級もない。みんな一團だといふ氣が、實に人間を美しくする。塹壕にゐても暗い民家の宿舎にゐても、故郷を同じくした者が集つたやうに、單なる日本語の一片すら有難くなるのであるから、一本の蠟燭の灯の下で、一個の罐詰もみんな食べてたら、肚の底からうれしい安心が出てくるのだ。

然しその兵隊さん達と別れて、こんどは歸るといふことになる、一種の哀愁と共に何だか非常にすまない氣がして、飛行機の窓から前線をのぞき、だん／＼後部へ離れてゆくのが、たまらない寂びしさだ。この見るといふこと、經驗するといふことに、われ／＼の使命がある、重點があるといふことには氣がつくが、さて、それをどう生かすか、といふことになる、何だか慚愧せよ、入からぬものが、肚の中にあるやうに思ふ。これは私ばかりでなく多くの從軍者が經驗す

ることであらうと思ふが、この聖戦の意義、この時代の日本といふことを結びつけて、大いに考へ大いに肚を定めてかからねばならぬ問題が、お互ひの肩にかかつてゐるのだ。

われ／＼には經濟戦といふことはよく解らない。外交關係も解らない。三國との思想關係も解らない。然し只一つ解ることはわれ／＼は見た——といふことだ。ここに立つよりわれ／＼の立場はない。その點で、前線もさることながら、後部の人々の勞苦であるとか、宣撫工作、再建設といふことが氣になつて、南京で見た教育の方向なども、非常に感動すべきものがあつた。その最も貧民窟の小學校に、若い朱洪生といふ女の先生がゐて、理窟なしに「子供は素直に育てたいものであります。それにはこの學校にも一つ花園が欲しいと思ひます。それは日本と支那とが手をとつて作つた、美しい東洋の花園でなければいけないと存じます」と耻かし氣にいつた言葉には感心した。

それともう一つ、歸りの上海で南京路の本屋へ行くと、支那の青少年がいかに熱心に立讀みしたり、本を買つてゐるかといふことに驚いた。私もそこで詩集(現代の)、民謡集、流行歌集などを買つて來たが、最近の支那青少年には恐るべきものがあるやうに思ふ。蔣政權はこの青少年層をいかに巧みに利用してゐるかといふことも、こんどの事變の深い重點の一つであるが、これも考へなくてはならない。彼等とほんとうに手を組める時に、日本の青年層はより確かなものでな

いと、二十年三十年後が氣になるのである。蔣政權はやがて没落しよう。然るに次に來るものは何か、それを考へるのもわれわれの義務である。私は又上海から内地への飛行機の上で、青い空と雲の中をとびながらこの問題について、私の肚の中をもう一層よく整理してかからねばならぬことを痛感し、この問題を携へて、先づ現代の青年層に問ひかけて見ようと決心した……。

佐藤惣之助年譜

明治二十三年（一歳）

十二月三日、神奈川県川崎市（現在川崎市）砂子一ノ二十六に生る。父慶治郎の次男、母ひめ。佐藤家は代々惣左衛門と稱し、東海道川崎宿の草分、本陣にして苗字帯刀を許された。父の代に至り雜貨商を營む。

明治三十年（八歳）

四月、川崎小學校に入學。

明治三十五年（十三歳）

三月、同校尋常科を卒業。

四月、高等科に進級。

明治三十六年（十四歳）

三月、高等科一學年修業。

四月、東京市麻布區飯倉町糸商萬文支店渡邊文兵衛方に商業見習として上京。

明治三十七年（十五歳）

俳誌「半面」に關係し、千家元麿氏と交友を結ぶ。

明治三十九年（十七歳）

渡米を志して、萬文を退き渡航許可を受けんとしたが、眼疾のため許されず断念し専ら家業を手傳ふ。

佐藤紅緑の秋聲會の同人となる。續いて俳誌「とくさ」の同人となる。

明治四十年（十八歳）

曉星中學附屬佛語專修科に入學、自宅より通學し、二箇年フランス語を學ぶ。

九月五日、曾祖母いと逝く。

十一月、佐藤紅緑に隨行して、信州柏原の「一茶八十年忌」に參行、歸途諏訪湖に遊ぶ。

明治四十一年（十九歳）

父慶治郎と共に伊豆に旅す、續いて伊勢參拜をする。

明治四十三年（二十一歳）

再び上京して、神田、築地などに下宿、小山内薫、吉井勇など、交遊し劇作を試みた。福士幸次郎、千家元麿、高村光太郎、木村莊八等と雑誌「テラコッタ」を創刊。

明治四十四年（二十二歳）

京都に遊ぶ。

横濱市真砂町真田麻輸出商川田邦治郎氏長女で従妹にあたる花枝と結婚。
東京市麻布區筭町の新居に移轉す。

明治四十五年（大正元年）（二十三歳）

同市赤坂區新町に移轉。

大正四年（二十六歳）

川崎に歸る。

十一月、妹せい子醫師齋藤宗久と結婚。

十二月、天弦堂より處女詩集「正義の兜」を出版。

大正五年（二十七歳）

一月八日、祖母つね死す。

十月三日、父慶治郎逝く。

大正六年（二十八歳）

詩誌「大洋の岸邊」を發行。

十月、「狂へる歌」を無我山房より出版。

大正八年（三十歳）

詩誌「嵐」を創刊。

詩話會編篇「日本詩集」に詩を寄す。同詩集は昭和元年まで年刊八冊を新潮社より發行、每號詩を寄す。

大正九年（三十一歳）

一月、詩集「満月の川」を叢文閣より出版、千家元麿の詩誌「詩」に關係、同人と共に詩集「麥」を叢文閣より出版。

大正十年（三十二歳）

十二月、新都市雜曲詩集「深紅の人」を日本評論社より出版。

大正十一年（三十三歳）

三月、自然詞華詩集「荒野の娘」を大鏡閣より出版。

四月、詩集「華かな散歩」を新潮社より出版。

六月、琉球八重山諸島を遊行して、七月歸宅する。

七月、詩集「季節の馬車」を現代詩人叢書のうち新潮社より出版。
十月、散文集「市井鬼」を京文社より出版。
十二月、詩集「琉球諸島風物詩集」を京文社より出版。

大正十二年（三十四歳）

二月、詩集「雪に書く」を二松堂より出版。
七月、「颯風の眼」をアルスより出版。
同、句集「畫眉草」（高橋心一共著）を新作社より出版。
九月一日、關東大震災のため、自宅の損害多し、千家元麿氏一家が横濱より避難して數箇月寄居す。

大正十三年（三十五歳）

一月、關東大震災に詩話會員と他の詩人を含む共同詩集「災禍の上」（新潮社出版）に詩を寄す。
四月、川崎に新居の建築落成す。

五月、隨筆集「蠅と螢」を新作社より出版。
八月、小曲詩集「水を歩みて」を新作社より出版。

大正十四年（三十六歳）

五月、川路、室生、白鳥、福田等と伊豆湯ヶ島、古奈に遊ぶ。
七月、詩誌「詩の家」を創刊。

大正十五年、昭和元年（三十七歳）

四月、民謡集「浮れ鴛鴦」を紅玉堂より出版。
四月、川路、室生、萩原、千家、百田、白鳥、福田等と伊豆下田に赴く。

昭和二年（三十八歳）

一月、隨筆集「酒はまだある」を春秋社より出版。
四月、白鳥、福田と共に四國高知市に講演に出かく。神戸より舟航し、歸途大歩危、小歩危の險を自動車にて越え、吉野川に添うて池田、徳島に出づ。

昭和三年（三十九歳）

五月、滿洲に旅立つ。奉天、鄭家屯、チチハル、ハルビンなどに赴く。與謝野寛、晶子夫妻と行を共にし、歸途單身にて京城、平壤、慶州石窟宅などに立寄る。

昭和四年（四十歳）

六月、飯田九一と共に北海道に旅し、途中駒ヶ嶽の噴火に會ふ。

八月、詩集「トランシット」を素人社より出版。

同、信州戸倉温泉に夏を過す。

十月、詩集「波止場の娘」を泰文館より出版。

同、佐渡に白鳥と共に遊び、若宮八幡の鬼太鼓の行事などをみて四日滞在。

十一月、埼玉縣秩父の篠高に遊ぶ。

十二月、現代詩人集第十卷（新潮社發行）に福士、千家と共同詩集を収む。

昭和五年（四十一歳）

四月、福島縣相馬中村に遊ぶ。

九月、隨筆「釣と魚」を武藏野書院より出版。

十一月、隨筆集「青神」を白帝書房より出版。

昭和六年（四十二歳）

一月、マニラ、フィリッピン、香港、上海、廣東などを一巡して遊ぶ。

同、隨筆集「凄氣の圖」を日向堂より出版。

六月、詩集「西藏美人」を現代評論社より出版。

八月、飛驒高山に遊ぶ。

十月、長編小説「處女線を截る」を横濱貿易新報に連載、百二十八回、挿畫は飯田九一。

昭和七年（四十三歳）

一月、「詩の家」七十八冊で終刊す。

六月、大隅の佐多岬、鹿兒島、小根占、日向、延岡、熊本を旅す。

昭和八年（四十四歳）

- 一月三十日、妻女花枝逝去す。
五月、螢蠅盧句集を出版。
六月、非人稱命題叢書（詩の家版）詩集「花心」を刊行。
十月、同叢書で詩集「燕」を出版。
同、萩原朔太郎氏妹周子と結婚。
十一月、「異曲歌謠集」を岐阜詩人会より出版。

昭和九年（四十五歳）

- 四月、隨筆「釣心魚心」を第一書房より出版。
十一月、個人誌「馬齡」を發行。
同、再度滿洲に釣竿の旅に赴く。

昭和十年（四十六歳）

- 十一月、隨筆集「笑ひ鳥」を龍星閣より出版。

昭和十一年（四十七歳）

- 四月、「釣魚隨筆」を竹村書房より出版。
十月、小説集「支那のランプ」を版畫莊より出版。
十一月、個人誌「馬齡」廢刊。

昭和十二年（四十八歳）

- 五月、東京市大森區雪ヶ谷に移轉。
六月、紀行文集「旅窓讀本」を學藝社より出版。

昭和十三年（四十九歳）

- 二月、詩誌「紀」を發行。
八月、「詩と歌謠の作り方」を新潮社より發行。
九月、支那事變從軍文藝家の第一班に屬し久米、淺野、林、片岡、川口、深田等と共に武漢攻

略戦に従軍して「従軍日記」(未刊行)を記す。
十一月、歸還す。

昭和十四年(五十歳)

一月、富士岳麓山中湖に氷上の公魚釣に出かけた。
同、句集「春羽織」を風流陣より出版。
三月、「愛國詩集」を、むらさき出版部より出版。
四月、川路、林芙美子と共に富山に遊ぶ。
五月、従軍詩集「怒れる神」を足利書房より出版。
十一月、隨筆「釣するところ」を萬里閣より出版。

昭和十五年(五十一歳)

三月、コロムビア會社專屬作詩家として入社。
四月、佐藤紅緑、伊藤葦天と吉野に遊び、三人の共同句集を刊行。
六月、紀州熊野川の鮎釣に佐藤垢石、上山草人らと赴く。

昭和十六年(五十二歳)

四月、日本歌謠學院顧問並に作詩部講師となる。
五月、小笠原島に釣の旅に出かく。
六月、「青年詩集」を新興音楽社より出版。
同、「釣魚探心」を三省堂より出版。
七月、詩集「わたつみの歌」を「ぐろりあ・そさえて」から出版。
十月、隨筆集「釣の講座」を春陽堂より出版。

昭和十七年(五十三歳)

四月、隨筆集「春すぎし」を鶴書房より出版。
五月十五日午後六時十二分腦溢血のため突如逝く。
戒名は芳光院慈潤日惣居士。
同十八日午後二時より三時まで自宅にて告別式、次で桐ヶ谷火葬場にて荼毘に附す。
七月二日、川崎市戸手日蓮宗正教寺の祖先代々の墓地に埋骨式。

十月、隨筆集「釣」を創元社より出版。

出文協承認あ330304號



著者 佐藤惣之助

發行者 櫻井均

印刷者 渡邊丑之助
(東京二二五)

發行所 櫻井書店

昭和十八年四月二十日印刷
昭和十八年四月廿五日發行

佐藤惣之助集 隨筆篇

定價參圓七拾錢

東京市小石川區大塚町三三番地

東京市芝區愛宕町二ノ一四番地

東京市小石川區大塚町三三番地
振替東京一六九〇九五番
會員番號一一〇三五番

配給元 東京市神田區淡路町二ノ九 日本出版配給株式會社

938
125

終

